

福井県埋蔵文化財調査報告 第126集

天神山古墳群

— 一般県道三尾野鯖江線道路改良工事に伴う発掘調査 —

2 0 1 2

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

天神山古墳群は、福井市と鯖江市にまたがる天神山丘陵に展開しています。これまでも、鯖江市教育委員会による宅地造成などに伴う発掘調査がなされており、その成果が報告されています。このたびの報告書は、平成14～16・21年度に当センターが実施した道路改良工事に伴う発掘調査の成果を報告するものです。

調査は、天神山丘陵北西側の、道路敷設のために削られる丘陵部分と水田部分を調査対象としました。丘陵では古墳時代前期の方墳・円墳各2基、弥生墳丘墓3基を検出するとともに、平安時代の須恵器が点在することを確認しました。これらのうち、28号墓で確認された祭式土器の出土状況は、当時の葬送儀礼に伴う土器祭式の一端を垣間見ることができるものであり、今後の弥生時代墓制研究において不可欠な資料となりました。水田部では、過去の圃場整備以前の地形を確認し、谷状地形の堆積土中に含まれる多量の遺物を検出しました。弥生時代・古墳時代の遺物のほか、平安時代から江戸時代までの遺物があり、なかでも平安時代の須恵器には風字硯の一部や転用硯、墨書の認められるものも確認されました。これらは付近の丘陵部に点在する須恵器とあわせて古代寺院の存在を窺わせるものです。

今回の発掘調査により、長期間・広範囲にわたる多様な痕跡が確認され、新たな知見や再発見、そして今後の研究に資する重要な資料を得ることができました。この調査および本報告が、地元の方をはじめとする福井県民の方々の、埋蔵文化財の意義とその重要性を理解する契機、また、そのための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成24年2月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 佐 藤 圭

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般県道三尾野崎江線改良工事に伴い、平成14～16・21年度に実施した天神山古墳群（福井県鯖江市入町、福井市三尾野町・花守町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 天神山古墳群の調査は、福井県福井土木事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、平成14・15年度は中川佳三・田邊和歌子、平成16年度は中川・御嶽貞義、平成21年度は御嶽・土谷崇夫が担当した。なお、平成16年度の調査区は丘陵尾根上と水田部分に分かれるため、丘陵尾根上を御嶽、水田部分を中川が担当して調査にあたった。
- 3 発掘調査は、平成14年11月1日から平成15年7月31日、平成16年7月1日から平成16年12月28日、平成21年4月1日から平成21年4月30日に実施した。出土遺物の整理作業は、平成16年4月1日から平成19年3月31日、平成21年4月1日から平成21年6月15日、平成22年4月1日から平成23年3月31日に、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は御嶽が当たり、御嶽のほか、赤澤徳明、山本孝一、藤本康司、水谷圭吾が分担して執筆した。なお、御嶽以外の執筆分担は以下の通りである。

赤澤 第3章第3節1、第5章第3節1	水谷 第4章第3節（管玉）
山本 第3章第4節2（縄文時代の遺物）	藤本 第5章第3節2
- 5 天神山古墳群に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。とくに平成14・15年度調査分は、錯認を正して大きく変更したため注意を要する。
- 6 検出遺構・出土遺物の図化、写真撮影、写真図版作成は、御嶽が、立壁肇（調査時、佛教学学生）、赤澤、岩田直樹、中村嘉之の協力を得て行った。
- 7 本書に掲載した地形図および遺構図は、株式会社帝國コンサルタントに委託して作成したものを一部改変して使用した。また、上空からの写真は、航空測量時に株式会社帝國コンサルタントが撮影したものである。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。挿図の縮尺は各挿図に記した。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は、第1・3・4・62図に真北を、それ以外に座標北を用いた。また、X・Y座標値は国土方眼座標系第VI系に基づく。
- 10 遺構図の縮尺は1/200・1/100・1/60・1/30を、遺物実測図の縮尺は1/4を基本とした。しかし、種別や大きさにより、適宜これら以外の縮尺も使用した。
- 11 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版「標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。
- 12 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが保管する。
- 13 平成15年に天神山丘陵南端の天神山城跡にて発掘調査を実施していた鯖江市教育委員会文化課の前田清彦氏と深川義之氏から調査に関わる情報や助言などをいただいた。平成16年度には、来訪した当時奈良県高取町教育委員会臨時職員の宍岐一哉氏（現徳島県市井町教育委員会社会教育課主事）に、思いがけず、27号墓埋葬施設の図化作業をしていただくこととなった。また、第5図の気比神社境内宝塔塔身の実測図・拓本は、古川登氏（福井市文化財保護センター主幹）に提供していただいた。墨書土器の判字は、吉田健氏（福井県文書館嘱託古文書調査専門員）、馬場基氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室主任研究員）のご協力を得た。ここに記し謝意を表す。
- 14 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 天神山古墳群の分布調査について	5
第4節 福井市三尾野町気比神社境内宝塔塔身について	10
第3章 平成14・15年度（A・B区）の調査	11
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構	11
第3節 遺物	25
第4節 その他の遺構と遺物	27
第5節 小結	29
第4章 平成16年度（C区）の調査	30
第1節 調査の概要	30
第2節 遺構	30
第3節 遺物	48
第4節 小結	52
第5章 平成16・21年度（D区）の調査	54
第1節 調査の概要	54
第2節 遺構	54
第3節 遺物	59
第4節 小結	64
第6章 総括	66

図 版 目 次

図版第1 遺跡

- (1) 調査地 遠景
- (2) 調査地 遠景

図版第2 A・B区の遺構

- (1) A・B区
- (2) A区 全景
- (3) A区 全景
- (4) B区 全景
- (5) B区 全景
- (6) B区 全景
- (7) B区 41号墳 墳丘検出状況
- (8) B区 42・43号墳 墳丘検出状況

図版第3 C区の遺構

- (1) C区 全景
- (2) 27号墓 墳丘検出状況
- (3) 27号墓 墓坑完掘後の状況
- (4) 27号墓 木棺痕跡と内部の角礫
- (5) 28号墓 墳丘検出状況
- (6) 28号墓 墓坑完掘後の状況
- (7) 28号墓第1埋葬 木棺痕跡検出状況
- (8) 28号墓第2埋葬 木棺痕跡検出状況

図版第4 C区の遺構

- (1) 28号墓第2埋葬 管玉検出状況
- (2) 28号墓 墳丘盛土下東隅付近土器出土状況
- (3) 28号墓 墳丘盛土下南隅付近土器出土状況

- (4) 28号墓 墳丘南側土器出土状況
- (5) 29号墓 墳丘検出状況
- (6) 29号墓 墓坑検出時の状況
- (7) 29号墓 墓坑痕跡検出状況

図版第5 D区の遺構

- (1) D区 (平成16年度) 全景
- (2) D区 (平成16年度) 全景
- (3) D区 (平成16年度) SE01
- (4) D区 (平成21年度) 全景
- (5) D区 (平成21年度) 土器集中地点①
- (6) D区 (平成21年度) 土器集中地点④
- (7) D区 (平成21年度) 土器集中地点⑦

図版第6 B・D区の遺物

- (1) B区 出土土器
- (2) B区 41号墳の副葬品と遊離遺物
- (3) D区 (平成16年度) の遺物
- (4) D区 (平成21年度) の墨書土器

図版第7 D区の遺物

- (1) 平成21年度調査区の弥生土器・土師器
- (2) 平成21年度調査区の木製品・石製品等

図版第8 C区の遺物

- (1) 墳墓群出土土器
- (2) 28号墓第2埋葬出土管玉
- (3) その他の出土土器

挿 図 目 次

第1図	天神山古墳群の位置	2	第33図	28号墓墳丘西側盛土状況	36
第2図	計画道路路線と調査区の位置	2	第34図	28号墓墳丘断面および堆積状況	37
第3図	周辺の遺跡	4	第35図	28号墓墳丘周辺土器出土状況	38
第4図	天神山古墳群と周辺の古墳分布	7・8	第36図	28号墓埋葬施設上土器出土地点	39
第5図	気比神社境内宝塔塔身と踏査時に 採集した空風輪	10	第37図	28号墓第1埋葬施設①	40
第6図	A区調査前の状況	12	第38図	28号墓第1埋葬施設②	41
第7図	A区調査後の状況	12	第39図	28号墓第2埋葬施設	42
第8図	B区調査前の状況	13	第40図	28号墓第1埋葬木棺裏込土器 出土状況	43
第9図	B区墳丘配置状況	14	第41図	28号墓第2埋葬管玉出土状況	43
第10図	B区古墳群の土器等出土地点	15	第42図	29号墓墳丘検出状況	44
第11図	B区須恵器等出土地点	15	第43図	29号墓墳丘断面および堆積状況図	45
第12図	41号墳墳丘盛土除去中の状況	16	第44図	29号墓埋葬施設	46
第13図	41号墳墳丘断面図	17	第45図	焼土坑	47
第14図	41号墳埋葬施設	18	第46図	墳墓出土土器①	49
第15図	42・43号墳調査後の状況	19	第47図	墳墓出土土器②	50
第16図	42号墳墳丘断面および堆積状況図	20	第48図	28号墓第2埋葬出土管玉	50
第17図	42号墳溝内土器出土状況	21	第49図	須恵器出土地点	51
第18図	43号墳墳丘断面および堆積状況図	22	第50図	その他の土器	51
第19図	断面で確認される43号墳の墳丘	22	第51図	D区（平成16年度）全体図	55
第20図	44号墳墳丘検出状況	23	第52図	D区（平成16年度）堆積状況	55
第21図	44号墳墳丘断面図	24	第53図	SE01	56
第22図	B区出土土器	25	第54図	D区（平成21年度） および工事立会遺構残存範囲	57
第23図	B区その他の遺物	26	第55図	D区（平成21年度） 谷状地形および谷川（SD01）	57
第24図	B区（41号墳）下層の遺構と 旧表土層の範囲	27	第56図	D区（平成21年度） 谷状地形堆積状	58
第25図	縄文時代の遺物	28	第57図	谷状地形内出土土器集中地点	58
第26図	C区調査前の状況	31	第58図	工事立会時検出土坑	58
第27図	C区埋葬施設（木棺痕跡） 検出時の状況	31	第59図	D区（平成16年度）の遺物	59
第28図	C区土器出土地点	32	第60図	D区（平成21年度）の遺物①	61
第29図	27号墓墳丘検出状況	33	第61図	D区（平成21年度）の遺物②	62
第30図	27号墓墳丘断面および堆積状況図	34	第62図	過去の地図に見える圃場整備により 消滅した根根	65
第31図	27号墓埋葬施設	35			
第32図	28号墓墳丘検出状況	36			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	4	第7表	C区その他の土器観察表	51
第2表	分布調査による天神山古墳群中の 古墳名称・号数の変更	9	第8表	D区（平成16年度）遺物観察表	59
第3表	B区出土土器観察表	26	第9表	D区（平成21年度）土器観察表	63
第4表	石器観察表	29	第10表	D区（平成21年度）木製品観察表	64
第5表	C区墳墓出土土器観察表	49	第11表	D区（平成21年度） 石器・石製品観察表	64
第6表	管玉観察表	49			

※第3・8・9表（土器観察表）の胎土欄に記載の番号が示す内容は以下のとおりである。

土師器（弥生土器）

- ①＝微砂粒（直径1mm以下）を少量含む。
- ②＝微砂粒（直径1mm以下）を多量に含む。
- ③＝砂粒（直径1～2mm）を含む。
- ④＝小石（直径2mm以上）を含む。

須恵器

- ①＝微砂粒（直径1mm以下）を少量含む。
- ②＝微砂粒（直径1mm以下）と砂粒（直径1～2mm）を少量含む。
- ③＝砂粒（直径1～2mm）を少量含む。
- ④＝砂粒（直径1～2mm）を多量に含む。
- ⑤＝砂粒（直径1～2mm）と小石（直径2mm以上）を含む。

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

天神山古墳群は、鯖江市と福井市に跨る天神山丘陵に展開する。天神山古墳群は、昭和40年代前半頃に山頂支群の測量調査・三ツ髯支群の発掘調査・天神山支群の4基の前方後円墳のうち高島古墳・中坂古墳の測量と狐山古墳埋葬施設の発掘調査が実施され、昭和48年に調査報告書（斎藤優編1973『福井県鯖江市 天神山古墳群』鯖江市教育委員会）が刊行されたことにより、地元でも広く周知されている。

その天神山丘陵の西裾に沿って県道三尾野鯖江線が南北に通る。この県道は、鯖江市と福井市を繋ぐ道路としては主要なものではなく道路幅が狭いが、交通量は比較的多い。この県道に沿って三尾野集落の水田等耕作地が展開しているため、耕作地への移動に危険が伴い、農繁期には耕作地への移動と通勤等交通の相互に障害をきたす状況であった。

この状況を改善するために県道の改良工事が計画され、平成13年に福井県福井土木事務所から福井県教育庁埋蔵文化財調査センターへ工事対象範囲内における埋蔵文化財の確認調査が依頼された。

確認調査の結果、対象範囲内やその近辺に墳丘状の隆起や山城の施設と見られる平坦面などが確認された。しかし、改良工事は既設道路間を新規路線により連結するもので、地理的な制限からそれらを回避するための路線変更は不可能であり、現状での保存が困難であることから、発掘調査を実施して記録保存することが妥当と判断された。そのため、平成14・15年度には対象となる丘陵尾根上について、遺構の性格や掘削深度、範囲の確認など、発掘調査を前提とした試掘調査が実施された。また、平成15年には丘陵谷間の試掘調査も実施し、谷間南半分の水田部分については、多量の遺物を包含する地点や遺構状の落ち込みが確認される地点があったことから、発掘調査が必要と判断された。

第2節 調査の経過

天神山古墳群の発掘調査は、工事工程上の都合により、平成14年11月1日～平成15年7月31日、平成16年7月1日～平成16年12月28日、平成21年4月1日～平成21年4月30日の大きく三つの期間に分けて、北から順次実施することとなった。

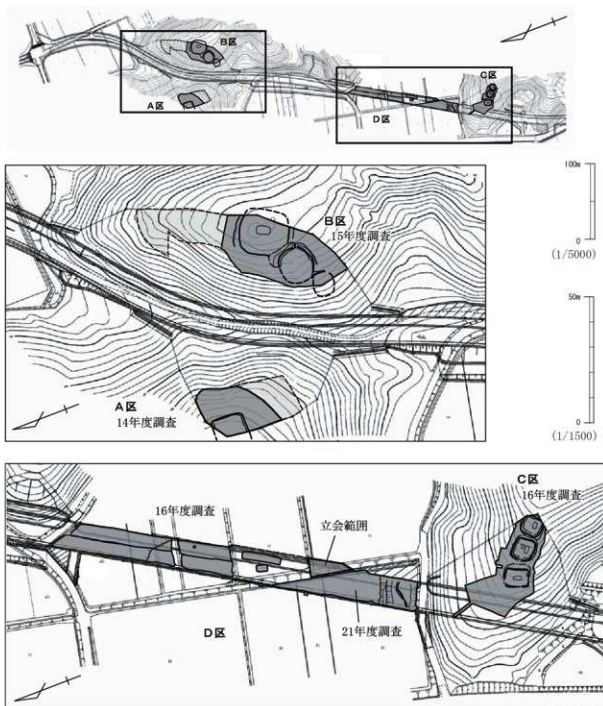
平成14・15年度は、天神山丘陵北端付近とその北西に急峻な鞍部を挟んで位置する独立丘陵状の尾根上にて発掘調査を実施した。そのうち、平成14年度はおもに独立丘陵状尾根の南東側（A区）、平成15年度はおもに天神山丘陵主尾根北端部の頂部から西側（B区）にて実施した（第2・4図）。

平成16年度は、南北に延びる天神山丘陵主尾根の中央付近から北西へ突き出す尾根の先端部分（C区）と、その北側の水田部分（D区）にて発掘調査を実施した（第2・4図）。このうちD区は、用地買収の不調により、南側約1/3の調査を次年度以降に先送りすることとなった。この後、調査が再開されるまで5年近い期間をあげるることとなった。

平成21年度の調査は、先送りされたD区南側の発掘調査である。このとき、工事工程上、調査区と既調査部分との間に再び調査し得ない部分が生じた（第2図）。しかし、その範囲は長さ数十m・幅数m程度の狭い範囲であったため、今後の工事の進捗過程で工事立会として対応することとなった。その工事立会とは本調査終了の3ヵ月後に為され、略式ながら調査を実施することができた。これにより、県道三尾野鯖江線改良工事対象地内にかかる天神山古墳群の発掘調査はすべて終了した。



第1図 天神山古墳群の位置 (縮尺1/3000万・1/300万・1/75万)



第2図 計画道路路線と調査区的位置 (縮尺1/5000・1/1500)

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

天神山丘陵は、福井県嶺北地方の平野部を福井平野と南越盆地に区分する山塊の南端に位置し、その所在は鯖江市入町・三尾野出作町、福井市三尾野町・花守町に跨る。丘陵の東は谷を挟み経ヶ岳（標高182m）に連なる。経ヶ岳の南には南北に細長い鯖江台地が約8km延び、盆地北部を東西に分断する。丘陵の西は北流する日野川と南西から流れる天王川・和田川との合流点にあたる。丘陵南を西流する浅水川は大正9年開削の人工流路である。天神山丘陵は、南北に長い天神山とその中央付近から東へ連なる通称三ツ禿山（標高165m）からなる。天神山の名称は丘陵南端の天満神社に由来し、そこが本来の天神山（標高54m）である。今回の調査地は、天神山北端とその北西の独立丘陵、天神山のほぼ中央から西へ突き出す尾根とそこに北接する水田部分であり、いずれも福井市三尾野町地係である（第4図）。

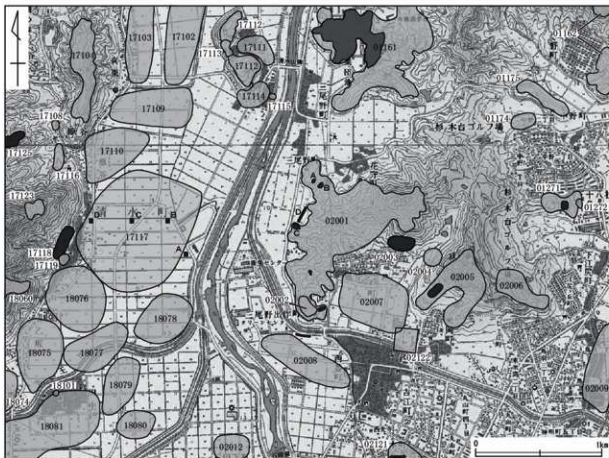
第2節 歴史的環境

天神山周辺には各時代の遺跡が数多く確認される。天神山古墳群以外の発掘調査例は、福井市教育委員会の三十八社古墳群・三尾野古墳群、旧清水町教育委員会の在田古墳群・飯谷在田遺跡、鯖江市教育委員会の経ヶ岳古墳群・西番遺跡、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの杉本笹野遺跡等がある。

以下、主な例を概説する。三十八社古墳群は6基構成とされ、そのうち3号墳が調査された。3号墳は一辺約12m・高さ2～2.5mの方墳で西辺中央に陸橋を備える。直接伴う遺物が無いが、埋葬施設が構築墓域とみられ前期古墳と捉えられる。三尾野古墳群は北・南・西の3支群に分けられ、そのうち西支群が調査された。造営時期は弥生時代終末期前葉～古墳時代前期後葉・後期前葉である。15号墓西溝から初期段階の装飾器台、7号墳埋葬施設から三又鋸が出土した。飯谷在田遺跡は4地点（A～D）で調査された。A地点は奈良時代の河道で、焼き土で須恵器が出土しており、船積みか荷揚げ時に不良品を投棄したものと考えられる。B地点は平安時代後期の水田下層から弥生時代後期・古墳時代前期前半の集落跡、弥生時代中期前葉の墳丘墓を検出した。C地点は弥生時代終末期前葉の墳丘墓3基を検出した。D地点は弥生時代中期初頭の管玉製作関連遺物が多量に出土した。西番遺跡は古墳時代後期前葉に廃絶・移動した集落跡であり、地理的・時期的な近似から天神山古墳群（とくに三ツ禿支群）との関連が想起される。杉本笹野遺跡は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭・後期中葉を中心とする集落跡である。

参考文献

- 松枝雅亮 1973 「経ヶ岳古墳群第8号墳の発掘について」
『福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学』第6号 福井工業高等専門学校
- 松枝雅亮 1974 「経ヶ岳古墳群第9号墳の発掘について」
『福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学』第7号 福井工業高等専門学校
- 岩田武志編 1987 「三十八社3号墳」「中山2号墳・三十八社3号墳」福井市教育委員会
- 坂清志編 1993 「福井市三尾野古墳群発掘調査報告書」福井市教育委員会
- 古川登編 2002 「飯谷」清水町教育委員会
- 前田清彦 2002 「西番遺跡」鯖江市教育委員会
- 鈴木篤英編 2008 「杉本笹野遺跡」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



第3図 周辺の遺跡（縮尺1/3万）

※濃い網線は一部再調査の遺跡もしくは調査された地点を示す。

第1図 周辺の遺跡

年次	通称名称	所在地	種別	時代	状況	備考
1	02001 天神山古墳群	神奈川県三浦市三尾出古作町、 横須賀市三ツ石町、横須賀市 横須賀三ツ石町、横須賀市	横須賀市/横須賀市	弥生・古墳・奈良・中世	山林	天神山古墳群50基 大正14年調査 1968年吉野史 2002・4年国史院調査
2	02002 大井山古墳群	神奈川県三浦市大井町	横須賀市/横須賀市	古墳・中世	山林	2003年吉野史
3	02003 天神山古墳群 ツツ木支所	神奈川県三浦市三ツ石町	横須賀市/横須賀市	古墳・中世	山林	21基（現存3基） 1992・73年国史院
4	02004 手尾古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	水田	
5	02005 飯沼古墳群	神奈川県三浦市・大井町	横須賀市	弥生・古墳	山林	42基（計207基） 1972・73年国史院
6	02006 フツジ山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳	山林	20基（現存11基）
7	02007 三ツ石山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳	水田	寺中嶋寺跡・山手遺跡を含む 6基現存の遺跡 2001年吉野史
8	02008 三ツ石山古墳群	神奈川県三浦市・横須賀市	横須賀市/横須賀市	弥生・古墳	山林	
9	02009 高井野段々遺跡群	神奈川県三浦市	横須賀市	奈良・平安	畑地/水田	
10	02012 石田山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・中世	水田	
11	02121 船木世帯遺跡群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳	畑地	6基現存の遺跡 1994年国史院
12	02141 佐野山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・中世	山林	13基 1988・91年国史院
13	01162 奥沢山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	中世	山林	
14	01174 中野古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	山林	
15	01175 三ツ石山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	中世	山林	
16	01176 三ツ石山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・中世	山林	6基（13戸・残存1） 1988年吉野史
17	01272 三ツ石山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・平安	山林	須賀郷第3基
18	17182 長妻古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・平安・古墳	水田	
19	17183 長妻古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳	水田	
20	17184 長妻古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	水田	1基
21	17185 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・平安・古墳	畑地/水田	
22	17139 洋谷古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	奈良・古墳	水田	
23	17110 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・奈良・古墳・中世	畑地	
24	17111 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・古墳・古墳	畑地	
25	17112 清水山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	山林	16基
26	17113 清水山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	山林	
27	17114 清水山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・古墳・中世	畑地	
28	17115 清水山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	中世	山林	
29	17116 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	山林	11基
30	17117 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市・横須賀市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳・古墳	水田	3基 須賀郷3基 2000年国史院
31	17118 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳	水田	3基 1980年国史院
32	17119 熊谷山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳	畑地/水田	
33	17123 在田古墳・段々寺跡	神奈川県三浦市	横須賀市	平安	山林	
34	17125 在田古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・中世	山林	
35	17190 在田古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・奈良・古墳	水田	寺子山跡、須賀郷
36	18074 乙姫山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳	水田	2000年国史院
37	18075 乙姫山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・中世	水田	
38	18076 在田山古墳群	神奈川県三浦市・横須賀市	横須賀市/横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳	水田	
39	18077 在田山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	中世・古墳	水田	
40	18078 乙姫山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・奈良・中世	水田	
41	18079 在田山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	古墳・奈良・中世	水田	
42	18080 在田山古墳群	神奈川県三浦市	横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳	水田	
43	18081 在田山古墳群	神奈川県三浦市・横須賀市	横須賀市/横須賀市	弥生・古墳・奈良・古墳	水田	

第3節 天神山古墳群の分布調査について

調査の契機 天神山古墳群は、昭和40年代に鯖江市教育委員会による部分的な発掘調査が実施されており、その成果とともに古墳の分布図が公表されている⁽¹⁾。その報告の中で、天神山古墳群は天神山支群・山頂支群・三ツ禿支群に分けられ、支群ごとに古墳名称等が設定されている。天神山支群では、確認される4基の前方後円墳を前方後円墳第1～4号墳としたうえで、それぞれ狐山古墳⁽²⁾・万丈古墳・高島古墳・中坂古墳としている。山頂支群では、支群の中央に位置する方墳3基とその周辺の詳細な分布図が掲載され、それらを1～8号墳としている。三ツ禿支群については宅地造成のためにほとんど消滅したが、存在した古墳の半数程度は発掘調査を為し得たようである。三ツ禿支群は南へ延びる4つの尾根に分かれて展開しており、そのうち東側の2つの尾根(第3・4尾根)上の古墳と、西端尾根(第1尾根)上の1基の古墳(庵ノ下古墳)のみ発掘調査が実施されている⁽³⁾。第3・4尾根上の古墳は分布図が提示されるが、庵ノ下古墳の位置は文章による記載のみである。これら以外の、各支群の主要古墳以外・調査対象外の古墳は、墳丘形態・基数を示すのみである。

平成15(2003)年には、鯖江市教育委員会による天神山支群南端に位置する天神山城跡の発掘調査が実施されており、確認された古墳(墳丘墓)が1～4号墳とされている⁽⁴⁾。天神山支群は前方後円墳のみに号数が振られていたが、改めて正式な号数が付されたことにより、各支群にて個別の号数が付されることとなった。ただし、各支群とも確認されるすべての古墳に網羅的な号数は付されていない。

それまでは鯖江市側での発掘調査のみであったが、平成14～16(2002～2004)年に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが福井市側にて発掘調査を実施することとなった(今回報告分)。調査地は、いずれも天神山支群中にあり、支群中の北端付近2地点と中央付近とに大きく離れて位置する。その位置関係と、鯖江市教育委員会によって天神山支群の南端付近から新たに古墳の号数が付されていたことから、調査対象となる古墳の名称・号数が問題となった。発掘調査に際しては、各調査区で古墳に暫定的な号数を付して対応したが、最終的な報告までに古墳の正式な号数を検討する必要が生じた。そのため、必要な情報収集・確認を目的として、天神山古墳群の分布調査を実施した⁽⁵⁾。

調査の成果 確認した古墳(墳丘墓)は、基本的にその確実性の高いものや調査により認識されたもののみに号数を付し、判断の躊躇されるもの・懐疑的なものには位置を示すのみで号数は付さないこととした⁽⁶⁾。天神山古墳群の支群名は、これまでのものを踏襲して、丘陵西側の南北に延びる尾根上に展開するものを天神山支群、天神山支群の展開する南北に延びる尾根の中央付近から浅い鞍部を挟んで東へ延びる尾根上に展開するものを山頂支群、山頂支群の南麓に展開する(していた)一群を三ツ禿支群とする。各支群において既に呼称されている古墳の号数・名称についても、基本的にこれまでのものを踏襲することとした⁽⁷⁾。以下、過去の報告と比較しつつ、各支群の分布調査結果を報告する。

天神山支群は、51基の墳丘と判断の躊躇されるものや可能性のあるもの23地点を確認した。鯖江市教育委員会により1～4号墳とされる古墳(墳丘墓)は、支群中の南端付近にて新たに確認された古墳(墳丘墓)である。その位置が南端ではないため号数配置がやや不規則とはなるが、これらに続いて概ね南端から北上しつつ号数を付すこととする⁽⁸⁾。天神山支群は、古墳の立地・分布やそれらの様相から、さらに小支群に分けることができる。すなわち、東側を正面観とする1～9号墳、方墳が主体となる10～16号墳、前方後円墳と大きめの円墳からなる17～22号墳、小型の方墳(墳丘墓)からなる23～29号墳(墓)、山頂支群との分岐付近の30～35号墳・円墳からなる36～38号墳・主尾根北端に位置する39～43号墳・主尾根北西の独立丘陵上南側に展開する44～48号墳・独立丘陵北側の49～51号墳(墓)

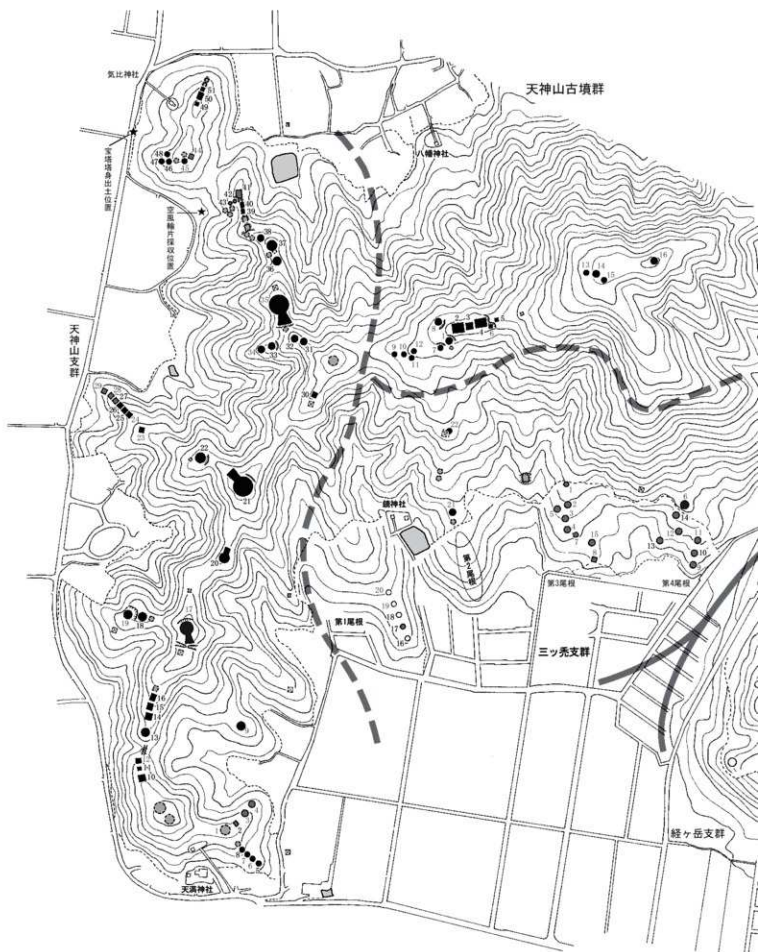
の9小支群である。なお、狐山古墳（前方後円墳第1号墳）は17号墳、万丈古墳（前方後円墳第2号墳）は20号墳、高島古墳（前方後円墳第3号墳）は21号墳、中坂古墳（前方後円墳第4号墳）は35号墳となる。狐山古墳（17号墳）の西隣に狐山西古墳（前方後円墳）があるとされていた⁽⁹⁾が、前方部とされる箇所は別墳丘の可能性を考え得る状況であるため、円墳（18号墳）とした。

山頂支群は、16基の墳丘と可能性のある2地点を確認した。その分布は、中央部の方墳を中核とする一群と、その東西の円墳群とに分かれる。既に分布図の提示される中央の1～8号墳のうち5号墳は、提示される箇所より東に位置することを確認した。また、7号墳とされる平坦面は墳丘として捉えることの困難なものであったため、1号墳の南西にて新たに確認したものに振り替えた。なお、1～8号墳はいずれも方墳とされていたが、小型のものについては必ずしもそうではないようである。この一群の西側に確認した4基の円墳は、9～12号墳とした。過去には約10基が遺存したとされており、大半の古墳が既に消滅しているということになる。東側の一群は、報告どおり4基の円墳からなり、13～16号墳とした。なお、16号墳の盗掘坑内は堆積が少なく、現在でも図示された石材の状況を確認することができる。16号墳は経塚であると報告される（山頂経塚）が、石塔片の出土が報告されていることから、古墳を改変した中世墓と捉える方が妥当と考えられる。

三ツ禿支群は、現存する古墳3基と可能性のある3地点、方形の平坦面1地点を確認した。このうち1基の古墳が、既に埋葬施設など一部が調査され消滅したのと思われていた畠中古墳であることを確認した。このことから、既に消滅した部分についても可能な限り位置を復元することとした。その結果、三ツ禿支群が展開する4つの尾根のうち中央西側の尾根（第2尾根）上について、古墳の存在したことは確実であるものの基数が特定できない以外は、昭和40（1965）年頃の古墳の分布状況を把握することができた⁽¹⁰⁾。既に調査された1～15号墓のうち6号墳は、遺構・遺物がなく転落した巨石のみであると報告されることから、これを欠番とし、号数の付されないまま現存する畠中古墳に振り替えて6号墳とした。また、その報告中に、西端の庵ノ下古墳の位置した尾根上には5基の小円墳が存在したこと、庵ノ下古墳の北側に3基の円墳が遺存したことが明記されており、それらの位置は比較的容易に推定される。それら5基を尾根先端から16～20号墳とした。庵ノ下古墳は17号墳となる。新規に確認された2基（南側から21・22号墳とする）は、第2尾根の上方にあたる。それらの分布状況から、尾根ごとに4つの小支群が形成されていたことが窺える。

以上、天神山支群51基、山頂支群16基、三ツ禿支群の過去に調査・消滅した20基と新規に確認した2基の合計89基の古墳と、不確実ながら古墳の可能性の考えられる地点約30箇所を確認した。このうち、平成14・15（2003・2004）年度調査対象の古墳は41～44号墳となり⁽¹¹⁾、平成16（2005）年度調査対象の古墳（墳丘墓）は27～29号墓となる⁽¹²⁾。

今後の対応 天神山古墳群は福井市と鯖江市に跨って展開するため、両市の対応によっては古墳号数の混乱・支群の細分化を導きかねない状況にあった。東側に展開する経ヶ岳古墳群やツツジヶ丘墳墓群も同様に両市に跨るが、ゴルフ場開発や宅地造成により既に大半が半壊・煙滅した悲惨な状況である⁽¹³⁾。開発の活発化していない現段階にて天神山古墳群全域を踏査し、その分布を把握し得たことは幸いである。今後の開発・調査に際して無用な混乱を避けるために、天神山古墳群の古墳名称・号数を踏襲すべきであり、強く勧めるものである。以降、新たに確認される古墳などについては、号数の配列がランダムなものとなってしまうが、各支群中の末尾の号数を付して対応することとなる。



第4図 天神山古墳群と周辺の古墳分布 (縮尺1/6000)

天神山17号墳 (孤山古墳)	35.8m	前V期
天神山20号墳 (万丈古墳)	24.0m	前VI期?
天神山21号墳 (高島古墳)	45.6m	前VII期?
天神山35号墳 (中坂古墳)	46.0m	中III～VI期?
経ヶ岳古墳 (山城堀切により切断)	54.9m	中I～II期?



山頂支群



本経ヶ岳古墳群のうち発掘調査が実施された経ヶ岳支群1～10号墳は、概要の報告された8・9・10号墳以外は位置が確定的でない。

註

- 1 斎藤 俊編1973『天神山古墳群』鯖江市教育委員会 同書に掲載される分布図は、二色刷りの印刷誤差のために、すべての古墳の位置が概ね南東へずれて印刷されている。
- 2 孤山古墳は、埋葬施設のみを発掘調査が為されている。
- 3 三ツ壳支群は、宅地造成のためほとんど残存しない。多数の古墳が未調査のまま破壊された。なお、1973年の報告中では、三ツ壳支群に属する庵ノ下古墳を天神山支群とする等の混乱が認められる。今回、これを改めて三ツ壳支群内の古墳とした。
- 4 深川義之2005『天神山城』鯖江市教育委員会
- 5 分布調査は、平成16年度調査期間中の現場作業終了後あるいは休日を利用して個人的に実施した。なお、限られた時間の中で、立壁 肇氏（当時、仏教大学学生）に数日同行していただいた以外は単独であったため、墳丘規模の計測はままならず、今回の成果に反映することができなかった。分布図中の墳丘を示す記号の大きさは、前方後円墳以外は周囲との相対的なものであり、必ずしも実際の規模を示すものではない。なお、分布調査は、中川佳三氏（当時、当センター主査）を経由し、福井市文化財保護センター所長 岩田武志氏、鯖江市教育委員会文化課主任 前田清彦氏・主事 深川義之氏（いずれも当時の所長）にその旨を伝え、了解を得たうえで実施した。
- 6 これまでの分布調査報告の中には、疑わしい墳丘状の隆起についても出来る限り号数名を付すというものが見受けられる。その場合、いたずらに基数を増やすのみで、実態から乖離することが考えられる。そのため、確実性の高いものにのみ号数を付し、可能性もあるものの疑わしいものについては位置を示すのみとして号数は付さなかった。これにより、疑わしいものすべてに号数を付す方法とは異なり、群中の確実な古墳は約〇基あるいは群中の古墳は〇基以上と表現することができる。
- 7 ただし、過去の報告の中で誤認されていることが明らかになったものや、その番号が存在が明らかであるにもかかわらず号数の付されていないものに振り替える等の調整を行った。過去の号数を尊重したため、尾根先端部から統一した号数を付す等ということができず、号数の付け方はランダムなものとなった。なお、鯖江市教育委員会2005年報告の1号墳については、TK209窟式期の須恵器が出土しているものの、山城としての利用が明らかであり、墳丘根と見えるごく一部を検出したに過ぎないことから、本来であれば古墳として認定するには根拠が薄い。しかし、ここでは無用な混乱を避けるため、鯖江市教育委員会報告を尊重して1号墳とするが、分布図中の記号については不明瞭なものとして表記する。また、当センターが実施した天神山支群北端の調査（B区）において仮3号墳としたものは、古墳等とする根拠を欠いたため号数を付さない。古墳等であれば墳丘の一部が調査対象地外に残る状況であるため、今後古墳等であることが確認された時に改めて号数を付すこととなる。
- 8 過去に示された分布図の南端から5～8号墳とし、東側に延びる尾根にて昭和60（1985）年に発見されたものを9号墳とした。これ以後は、尾根上の古墳について、南から北あるいは東から西へと機械的に号数を付した。
- 9 青木豊昭1983『古墳は語る』〔鯖江市史 通史編〕 鯖江市史編纂室
- 10 中央西側尾根は昭和45（1970）年の削平時に、須恵器 器台片等が採集されたことによりその存在が知られ、もとの尾根の大きさが3基以上の古墳が消滅したものと見られている。また、昭和38（1963）年に陸上自衛隊駐屯地が移設されたことにより、中央東側の尾根先端部が未調査のまま消滅している。しかし、三ツ壳支群8号墓の存在や残存する地形の状況等から、その南東と南西に尾根が伸びていたようであり、そこに複数の弥生墳丘墓が連なっていたことが想像に難くない。
- 11 平成14・15（2002・2003）年度の調査対象となった古墳は、仮1号墳⇒44号墳・仮2号墳⇒41号墳・仮3号墳⇒欠番・仮4号墳⇒42号墳・仮5号墳⇒43号墳となる。
- 12 平成16（2004）年度の調査対象となった墳丘墓は、仮1号墓⇒27号墳・仮2号墓⇒28号墓・仮3号墓⇒29号墓となる。
- 13 第4図の経ヶ岳古墳群・ツツジ丘古墳群の分布は、平成21～22（2009～2010）年に実施した個人的な踏査の成果である。号数は付けていない。なお、経ヶ岳山頂の経ヶ岳古墳は、全長約55mの北東に前方部を向ける前方後円墳であるが、山城の堀切によりくびれ部付近で二つに切断されている。これまでは分断された前方部が前方後円墳と認識されていたようである。

第2表 分布調査による天神山古墳群中の古墳名称・号数の変更

三ツ壳支群			山頂支群		
1973 報告			2005 調査		
品中古墳	調査・現存		6号墳（品中古墳）		
1号墳	調査・消滅				
2号墳	調査・消滅				
3号墳	調査・消滅				
4号墳	調査・消滅				
5号墳	調査・消滅				
6号墳	石材堆積	誤認・欠番			
7号墳	調査・消滅				
8号墳	墳丘墓・消滅		8号墓		
9号墳	調査・消滅				
10号墳	調査・消滅				
11号墳	調査・消滅				
12号墳	調査・消滅				
13号墳	調査・消滅				
14号墳	調査・消滅				
15号墳	調査・消滅				
旧入集落東第1号墳	未調査・消滅		16号墳		
庵ノ下古墳	調査・消滅		17号墳（庵ノ下古墳）		
尾根上に5基の円墳	調査・消滅		18号墳		
庵ノ下古墳北側に3基	未調査・消滅		19号墳		
庵ノ下古墳以外消滅	未調査・消滅		20号墳		
旧入集落東第2号墳	新規		21号墳		
3基以上未調査消滅	新規		22号墳		
1973 報告			2005 調査		
1号墳	円墳		円墳		
2号墳	方墳		方墳		
3号墳	方墳		方墳		
4号墳	方墳		方墳		
5号墳	方形		5号墳（東側へ変更）		
6号墳	方形		方形		
7号墳	円墳		7号墳（西側へ変更）		
8号墳	円墳		円墳		
「この西側に約10基」とされる。			6基消滅?		
「東部に4基、いずれも盗掘」とされる。					
東端＝「山頂経塚」					
			9号墳		
			10号墳		
			11号墳		
			12号墳		
			13号墳		
			14号墳		
			15号墳		
			16号墳（中世墓）		
天神山支群			2005 調査		
1973 報告			2005 調査		
前方後円墳第1号墳＝孤山古墳			17号墳（孤山古墳）		
前方後円墳第2号墳＝万古古墳			20号墳（万古古墳）		
前方後円墳第3号墳＝高島古墳			21号墳（高島古墳）		
前方後円墳第4号墳＝中坂古墳			35号墳（中坂古墳）		

第4節 福井市三尾野町気比神社境内宝塔塔身について

天神山丘陵北西端に所在する気比神社の境内に、笏谷石製の宝塔塔身がある。これは、神社西側を南北に通る県道の側溝整備により露出したものを、地元の方々が境内へ運び安置したものである。その発見位置は神社南西の谷部分であり、周辺には大小の平坦面が展開する。地元の伝承では、時期・位置が不明確ながら、かつてD区付近に寺院が存在したとされ、その東側の丘陵西斜面にも多くの平坦面が展開するらしい。また、三ツ禿山山頂の中世墓の存在や、天神山古墳群の踏査中にB区南西斜面裾付近で五輪塔空風輪片を採集したことなどから、比較的広範囲に伝承の寺院に関わる施設が展開すると推測され、宝塔塔身もそれに関連するものと考えられる。なお、この塔身発見位置の字名は「寺ヶ下」である。

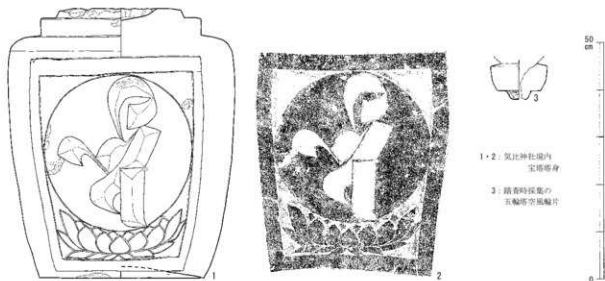
宝塔塔身は、下方が緩やかに窄まる縦長の壺形を呈し、計測値は全高57.2cm・最大径48cm・底径34.4cmである。首部は直径33.8cmでほぼ垂直に約4cm立ち上がり、その上面に直径27cm・高さ1.5～2cmの隆起がある。これは笠部との接合のための柄であり、上面に直径15cm・深さ2.5cmまでの粗い内削がある。塔身下面は、全面にわたり緩やかに削られ、中央での深さは約2.5cmとなる。塔身外面は丁寧に研磨されるが、製作以前の窪み等が確認され、露頭の転礫を加工したものと考えられる。

塔身の装飾は、正面のみであり、長方形の区画内に納まる蓮華座を備える月輪を持つ。長方形の区画は高さ約45cm・幅34～40cmで、縁が幅3cm前後の帯状に陽刻される。月輪は、素紋で面的に陽刻された陽刻式月輪であり、内側に多聞天（毘沙門天）を示す梵字の「ペイ」が薬研彫りされる。梵字は縁取り装飾のない普通梵字である。蓮華座は、請花座であり、陽刻表現による二段形請花aの普通請花に分類される。上段花卉は中央弁の左右両側に3弁ずつ見られる。下段の花弁は左右両側に4弁ずつ見られるが、中央弁を欠く。また、中房が表現されるが、いずれも間弁化している。越前式荘厳に伴う定型化した請花座と比較すると、花卉数や中房表現等多くの相違点が指摘できる。

製作時期は、梵字編年から13世紀第3四半期（1270年代）の可能性が高いものとみられる。

参考文献

古川 登・村上雅紀 2004 「越前地方における石造多層塔の研究－方山真光寺石造多層塔をめぐる一」
『片山島越墳墓群・方山真光寺踏査址』清水町教育委員会



第5図 気比神社境内宝塔塔身と踏査時に採集した空風輪（縮尺1/8） 宝塔塔身の実測図・拓本は古川登氏提供

第3章 平成14・15年度（A・B区）の調査

第1節 調査の概要

平成14・15年度に調査を実施したA・B区は、天神山丘陵北端付近の尾根が深く鞍状に落ち込む部分を挟んで対面する（第2・4図）。両調査区は大きく分断されるが、調査は一部並行して継続的に実施しており、A区の遺構・遺物残存量が少ないことから、A・B区の調査成果をまとめて報告する。

A区は標高30～37m、B区は標高29～37.5mの部分にあたり、最高所と南西側水田面との比高はともに約20mである。A・B区とも地形に即した任意の方眼地区割りを設定したが、グリッド杭の位置を地形の状況に合わせて適宜変更したためランダムな配置となり、地区割りの形状が一定しない。調査にあたり、確認されていた各墳丘に基準軸として十字方向のセクションベルトを設定したが、調査の過程で新たに確認した墳丘には対応できていない。また、調査の中で広く工事対象地内の表土を剥いで遺構確認を行った（第2図）が、周辺に遺構などは確認できなかった。最終的に墳丘盛土を除去したところ、残存した旧表土層中から縄文土器・石器が出土し、その下層で遺構を確認した。

第2節 遺構

確認した遺構は、古墳4基（A区：1基・B区3基）である。調査時には天神山古墳群中の一部を除き号数が付されていないかったため、北から1～4号墳と仮称した。以下、踏査結果（第2章第3節）を踏まえて天神山（支群）41～44号墳とする。A区の44号墳は近年の植林の際に墳丘が大きく削平されている。B区古墳も墳丘の流失が激しいが、調査区の全域にわたり古代の須恵器片が出土するため、当該期における削平・利用の可能性もある。ただし、それに関わる遺構は確認されない。その他、41・44号墳周辺にて縄文時代の遺物などを確認した。これについては節を改め、まとめて報告する。

1 41号墳（第12～14図）

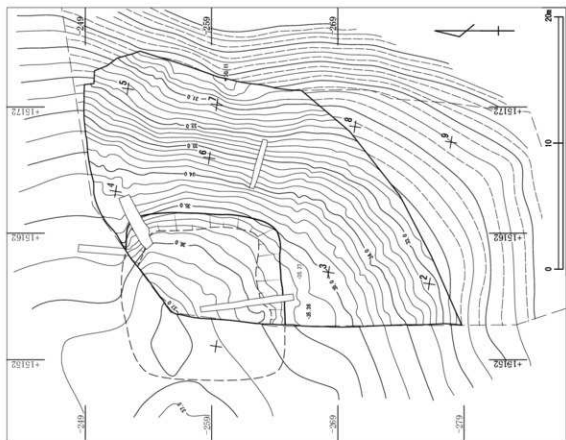
41号墳は、B区最高所の標高約35mに位置する。墳丘東側の一部が調査区外となるが、全形を窺うことができる。

墳丘 墳形は、尾根筋と一致する北北東～南南西方向に僅かに長い、方形に近い長方形である。規模は南北長19.6m・東西推定長18.6mである。墳丘残存高は北側約2.5m・南側約2.1m・西側約3.5mであり、東側は約1.5mとみられる。墳丘の南北にはそれぞれ約5m幅の平坦面が削り出され、墳丘裾には溝が伴う。西側裾には溝は伴わない。北溝は延長約13m分を検出した。幅1.3～2.8m・深さ0.35～0.4mである。南溝は延長約3m分を検出し、幅約1.8m・深さ0.2～0.4mである。

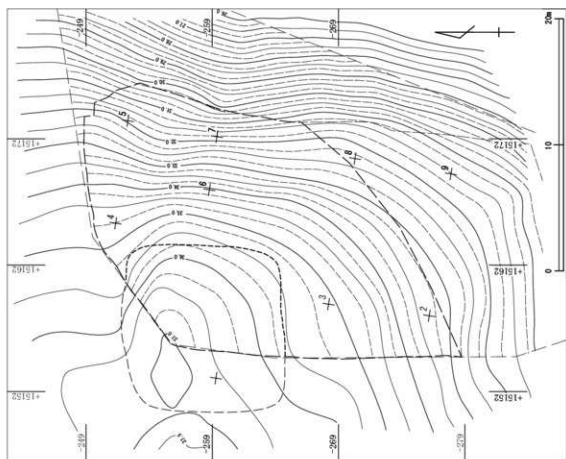
墳丘の造成は、墳丘部分を残して周囲を削り落とすことで墳丘裾を成形し、墳丘の上半部は盛土による。盛土は旧表土を除去せずに施されており、厚さ0.2～0.6mの盛土を施して南北方向の面的傾きを調整した後に、墳丘部分の内縁に土手状盛土を構築している。その後、土手状盛土内に北側から流し込むように盛土を充填して墳丘を整形する。

墳頂から4片、墳丘北側から12片、南側から5～9片の土器が出土したが（第10図）、細片のため詳細不明である。出土位置が古代の須恵器と混在するため（第11図）、二次的に移動したものかあるいは古代の土師器片と捉えることが妥当である。41号墳に伴う祭式土器は検出されていない。

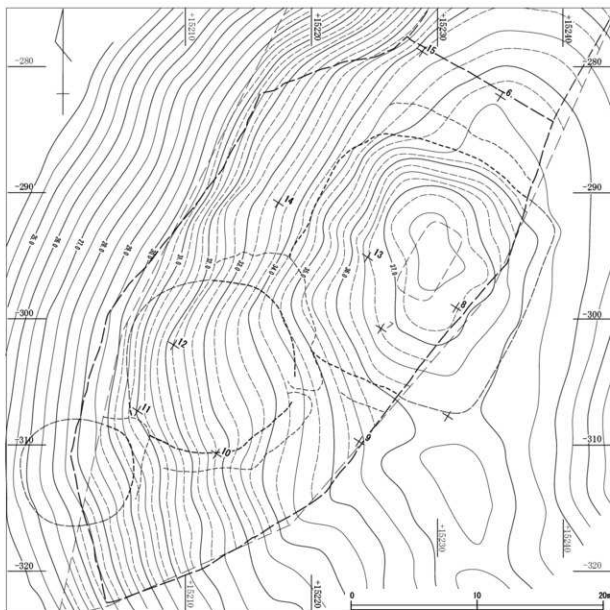
埋葬施設 調査中には認識できなかったが、墳丘断面図から埋葬施設の大まかな位置と規模が復元で



第7図 A区 調査後の状況（縮尺1/300）



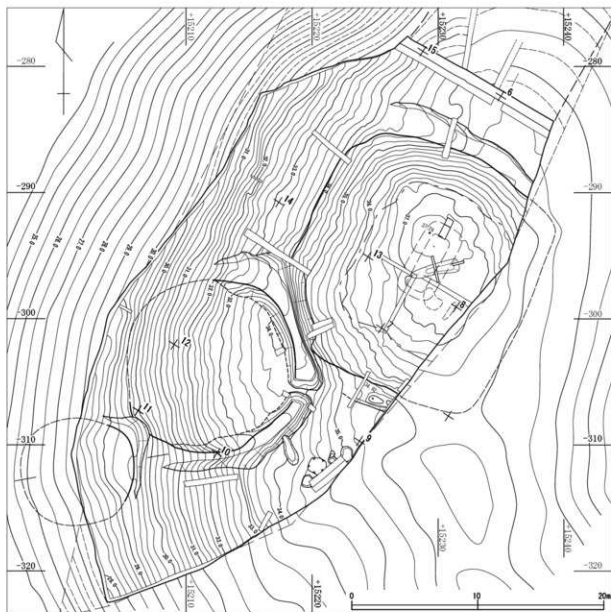
第6図 A区 調査前の状況（縮尺1/300）



第8図 B区 調査前の状況 (縮尺1/300)

きた(第14図)。埋葬施設は、墳丘内に構築された土状盛土の内側を墓壇とする構築墓壇であり、その中に木棺を埋設したものとみられる。構築墓壇は、墳丘中央からやや北に位置し、墳丘と長軸方向を一致させる。ただし、構築墓壇という性格のため形状は整なものとはならない。断面図によると、構築墓壇底面の中央がさらに低くなっており、棺壇を示すようである。構築墓壇の規模は長軸5.5m以上・短軸約3.1m・検出面からの深さ0.4～0.5mである。棺壇は上端で長軸約4.6m以上・短軸1.6m、下端で長軸約4m・短軸約1.1mである。棺壇底は北側が高い。木棺に関する情報がなく、棺形式は不明であるが、規模は棺壇と同様な規模かそれより小規模となる。

不時発見となった鉈(第23図)の出土位置は、構築墓壇内の棺壇上にあたる(第14図)。ただし、棺壇底面から0.18m程度浮いた状態で、木棺の腐朽・陥没に伴い棺内に落下した封土中に含まれる位置となる。つまり、棺内や棺蓋上に直接置いたのではなく、棺を一定量埋設してから置いたようである。検出時の鉈は棺に対し横位で刃部を西側に向けていた。鉈の向きは、陥没時に棺蓋上から空洞の棺内に落

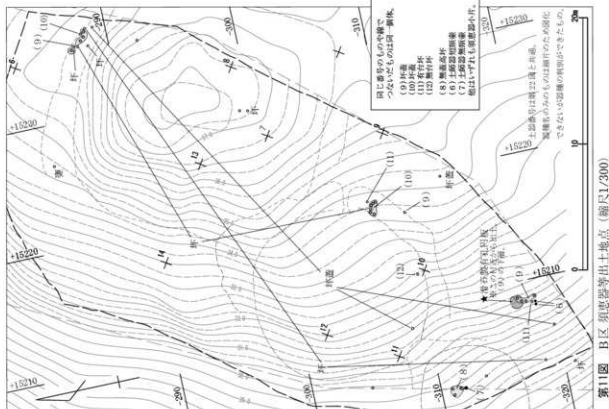


第9図 B区 墳丘配置状況（縮尺1/300）

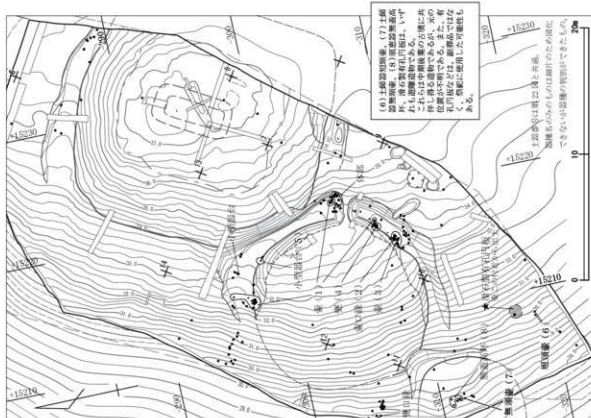
下する場合とは異なり、封土ごと落下する場合には大きく変化しないため、ほぼ安置時の向きを示すものと捉えてよい。被葬者頭位は、鉢の位置や棺壙の傾きなどから、北北東と解釈される。

この他、墳頂に斜行して細長い土坑が穿たれる。墳丘盛土の流出により掘り込み面が不明であるが、残存する最上層から掘り込まれ、埋葬施設を破壊している。遺物が伴わず、構築時期や性格は不明である。ただし、その堆積状況や形状などからは埋葬施設と認識することは難しい。古代における改変時以降の所産であろう。

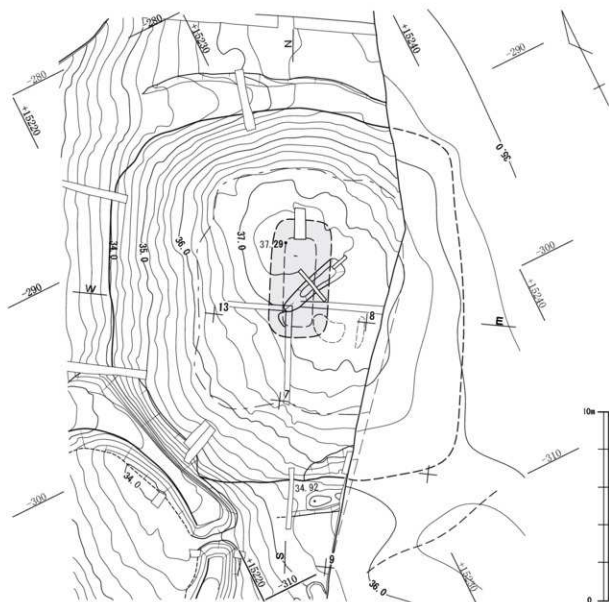
41号墳の造営時期は、時期を特定し得る遺物が検出されていないが、墳丘に認められる西日本の工法に古墳時代前Ⅰ期以降であることが示される。また、後述する42号墳は、出土土器から古墳時代前Ⅲ～Ⅳ期（前期中葉）の造営とみられるが、41号墳の墳丘を一部削って造営されている。そのため、41号墳の造営時期を古墳時代前Ⅰ～Ⅲ期（前期前半）と捉えられる。このことは、当該期の当地域において祭式土器の出土量が減少することとも齟齬をきたさない。



第11圖 B区須惠器等出土地点 (縮尺1/300)



第10図 B区古墳群の土器等出土地点 (縮尺1/300)

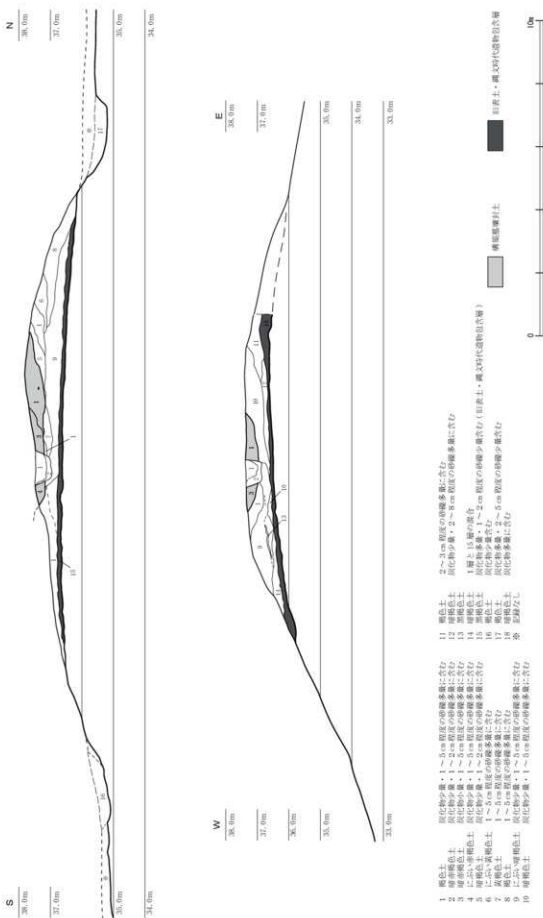


第12図 41号墳 墳丘盛土除去中の状況（縮尺1/200）

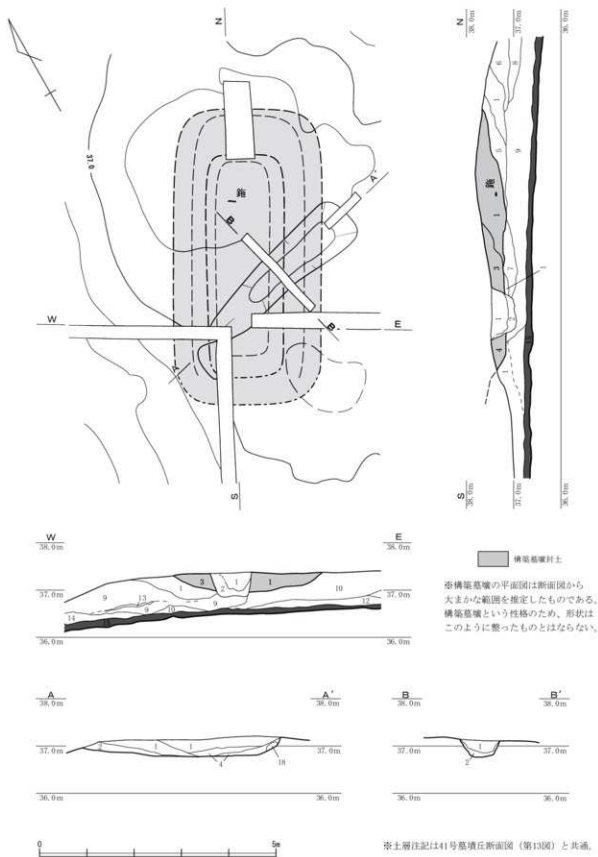
2 42号墳（第15～17図）

42号墳は、尾根頂部から西側の斜面に下る標高約30～33.5mに位置し、41号墳の南西隅を破壊して造営されている。

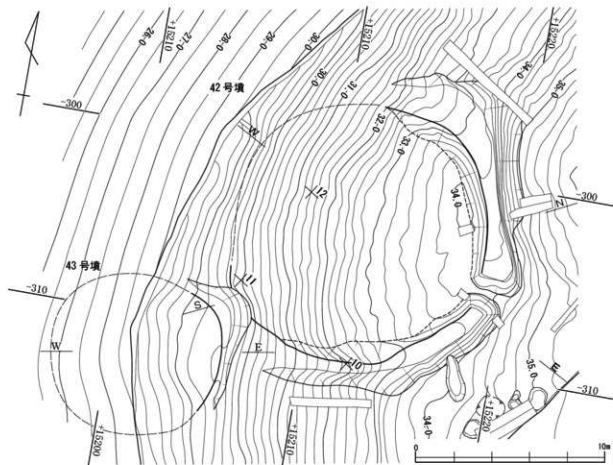
墳丘 墳形は歪な円形であり、墳丘東側には斜面から墳丘を切断する溝が巡る。その切断溝の中央付近には地山削り残しの陸橋がある。墳丘規模は東西13.4m・南北14.6mであり、墳丘残存高は西側約4.5m・東側約0.75mである。切断溝は延長約25m・幅1.8～3.5m・検出面からの深さ0.8m前後であり、陸橋部分は長さ2m前後・上端幅0.4m・下端幅1.8m・高さ0.3～0.6mである。墳丘上面は標高33～34m付近にて比較的平らで地山面が露出する状態となっており、人為的な削平を受けたようである。ただし、周囲の地山の状況との比較によると、墳丘盛土が失われたものの盛土下の地山には削平が及んでいないようである。埋葬施設は確認されていない。しかし、削平の及ばない地山に埋葬施設の痕跡が残存しないことから、埋葬施設は墳丘に盛土を施す過程で設置したことがわかる。



第13図 41号墳 墳丘断面図 (縮尺1/120)



第14図 41号墳 埋葬施設（縮尺1/80）



第15図 42・43号墳 調査後の状況 (縮尺1/200)

墳丘の造成は、東側は溝により切断して、西側は地山削り出して墳丘裾を成形し、墳丘上半部は盛土によりなされたものとみられる。ただし、盛土が残存しないため、盛土の構築方法は不明である。

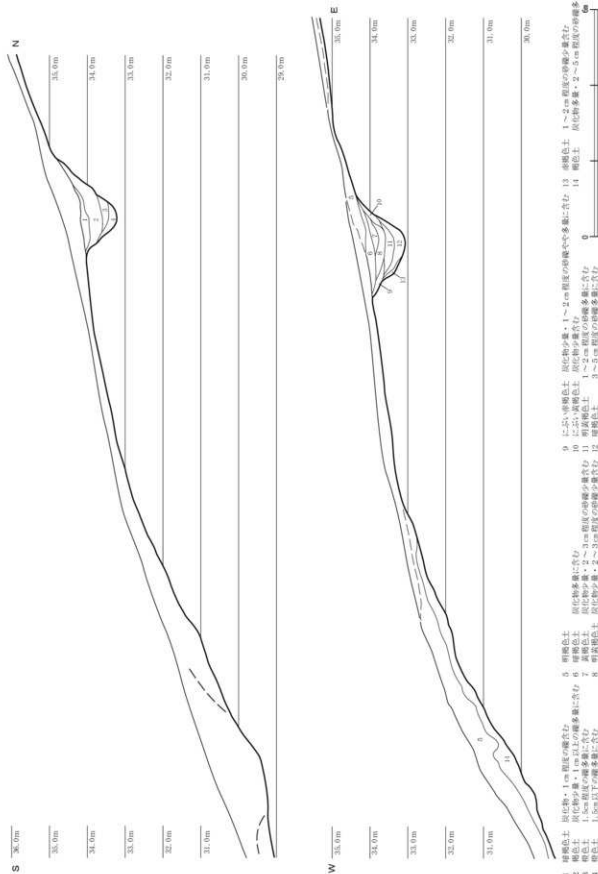
祭式土器は、墳丘周辺や切断溝内から出土した (第10・16図)。おもに切断溝内の陸橋周辺や墳丘北側に集中する。ほとんどが細片であったが、切断溝底面付近からは比較的まとまった状態で出土している。溝内出土の祭式土器は、壺形土器 (第22図1～3)、甕形土器 (4)、小型器台形土器 (5) などがある。(以下、「形土器」は省略) このうち、壺 (1) の出土位置は、陸橋の両側と墳丘北側の3か所に分かれている。このことから、葬送時に使用した土器を破砕して廃棄 (再配置) したことが窺える。

42号墳の造営時期は、祭式土器が長泉寺4・5 (古府クルビ1・2) 式期の範疇とみられ、古墳時代前期中葉 (前Ⅲ～Ⅳ期) と捉えられる。墳丘の重複状況も41号墳より後出であることを示す。

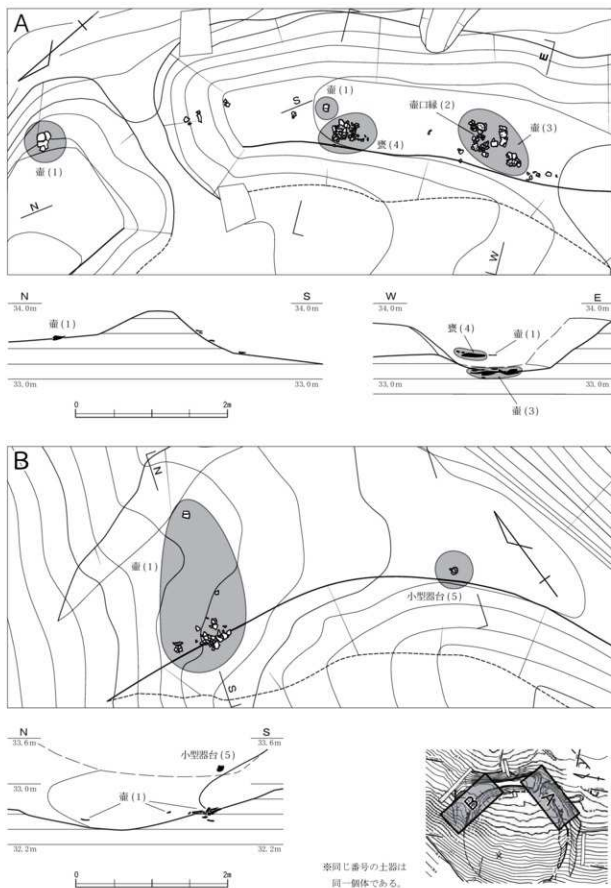
なお、41号墳と同様、42号墳周辺からも古代の須恵器が出土した。とくに東側の溝内堆積上の窪みにまとまる。また、墳丘南側へ7～8m程度離れた部分にも集中する地点がある。これらの地点と41号墳北裾から出土した須恵器片は相互に接合するものがある (第11図)。このように分散した出土状況を、そのまま当時の廃棄状況と捉えることはできないが、出土することがこの周辺を利用していたことの証左となる。これに関わる遺構は確認されないが、墳丘の削平がその頃に為されたことが考えられる。

3 43号墳 (第15・18・19図)

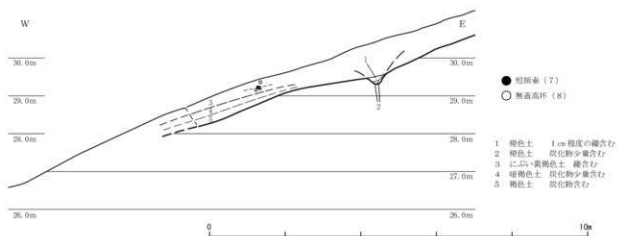
43号墳は、標高約27～29.5mに位置し、42号墳の墳丘南西を一部破壊して造営されている。なお、調査対象地内に位置するものの、西半部の調査が為されないままに消滅した。



第16図 42号墳 墳丘断面および堆積状況図（縮尺1/100）



第17圖 42号墳 溝内土器出土状況(縮尺1/50)



第18図 43号墳 墳丘断面および堆積状況図（縮尺1/100）



第19図 断面で確認される43号墳の墳丘

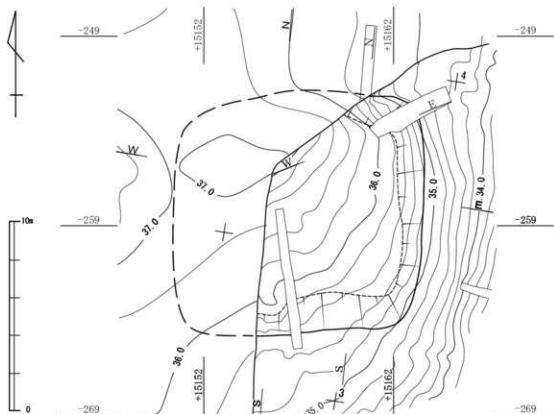
墳丘 墳丘は調査時の不注意のために正しく検出できていない。辛うじて残存した溝と未調査箇所の等高線（第8・9図）、写真に残された調査区壁面に見える墳丘断面（第19図）などにより、墳形は歪な円形とみられ、墳丘規模は南北8.5m・東西9mと読み取れる。墳丘残存高は西側で約3mである。残存した切断溝は延長約6m・幅0.7～1.8m・検出面からの深さ0.25m前後である。部分的な情報から復元した断面図（第18図）によると、墳丘上面は標高29.5m付近で削平されていたものと考えられる。写真に見える断面では、墳丘中央付近から南西側に旧表土様の土が確認され、その上に一部被るように北側から盛土していることが確認される。すなわち、南西側の斜面下方は旧表土を削り残し、部分的に盛土しているのであり、北側や小高い部分は旧表土や地山を削って傾斜を調節したことが窺える。

墳丘の造成は、墳丘基盤の傾斜を調整後、東側を溝で切断し、西側をおそらく削り出して墳丘裾を成形し、墳丘上半は盛土を施したのであろう。しかし、盛土が残存せず、構築方法は不明である。

遺物は、墳丘上に上方から転落した土器が確認されるが、43号墳に伴う祭式土器はない。

43号墳の造営時期は、出土遺物がないため明らかにし得ないが、42号墳の墳丘と一部重複する状況から42号墳よりも後出であることは明らかである。

なお、43号墳の墳丘上から出土した須恵器無蓋高坏（第22図8）の坏部と土師器無頸壺（7）が並ぶように出土したため、これを埋葬施設内に納められたものとする見解があった。しかし、高坏（8）の脚部片がこれらの10cm程度下や1m程北へ離れた表土直下から出土しており、墓壇を示す土層が確認されないばかりか、いずれも表土層中に含まれることが確認されるため、埋葬施設が失われた後に転落したものと判断した。また、43号墳の南東へ4～5mの部分から滑石製有孔円板が出土した。古代の須恵器などを取り上げた後、その下の広く柱状に残した部分を掘削中に出土しており、正確な出土位



第20図 44号墳 二次的盛土除去前の状況（縮尺1/200）

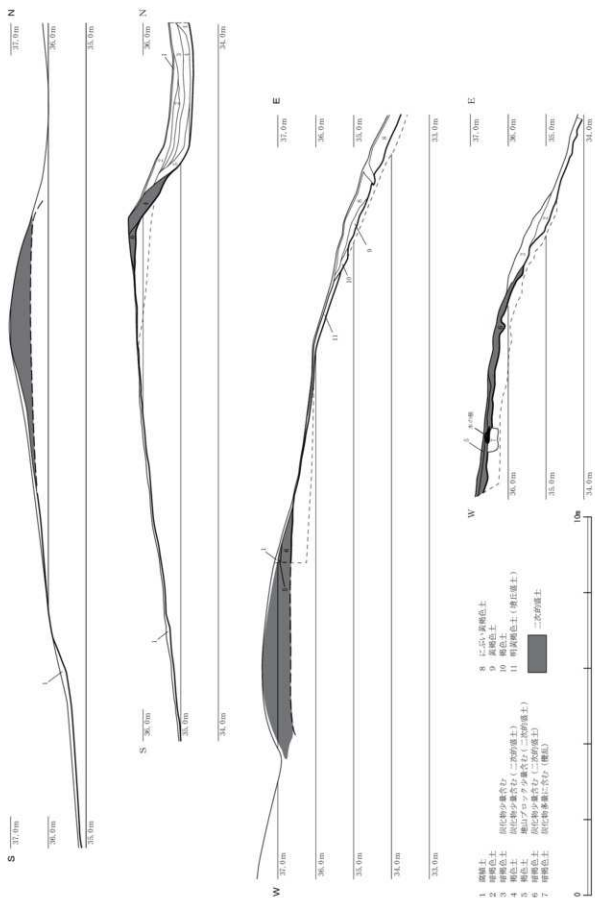
置は記録できていない。高坪（8）はTK208竈式期の範疇で捉えられ、滑石製有孔円板はおもに古墳時代中期以降後期前半にかけて副葬品に認められる遺物である。そのため、これらは中期後葉の古墳などに共伴し得る遺物と言える。出土状況はどちらも上から転落した状況を示す。ただし、B区の調査前の地形は41～43号墳の存在をよく示しており（第8・9図）、新たな古墳が重複して造営されていないことは明らかであることから、その古墳は今回の調査対象地外に求められる。あるいは、副葬品ではなく、尾根上での祭祀行為に使用した可能性もある。

4 44号墳（第20・21図）

44号墳は、尾根頂部から東側の斜面に下る標高約35mの部分に位置し、半分近くが調査区外となる。

墳丘 墳丘は大きく削平され、墳丘盛土は残存しない。墳丘削平後、墳丘北側に溝を掘っており、土を墳丘上に積み上げている。もともと墳丘の北と西に切断溝が巡るようだが不詳である。墳形は方形、墳丘規模は一辺13m前後、墳丘残存高は東側1.5m、南側1m、北側1.5mである。墳丘断面（第21図）に見える幅4m以上の溝は後世のものである。埋葬施設は残存しない。遺物は、墳丘北東隅付近から竈体部とみられる破片が出土したほか、墳丘上に二次的に盛り上げられた土の中から（二重口縁）竈の肩部とみられる破片や僅かな縄文土器片が出土した。墳丘北東隅の土器片は溝再掘削の影響を受けず、元の位置を留める。二次的に移動した土中の遺物は溝再掘削により移動したものと捉えられ、これらも44号墳の祭祀土器と捉えて差し支えない。また、僅かながら混入する縄文土器細片の存在は、少なくとも44号墳北側に縄文時代の包含層が展開する可能性を示すが、いずれにせよ遺物量は希薄なようである。

44号墳の造営時期は、不明瞭な状態ではあるものの祭祀土器が古墳時代前期中葉頃に位置付けられるものと考えられることから、概ね42号墳と同時期（古墳前Ⅲ～Ⅳ期）となる。



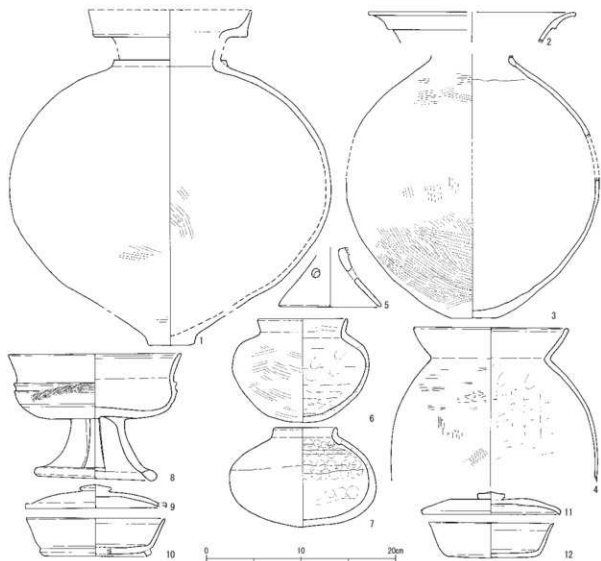
第3節 遺物

1 B区出土土器(第22図)

図化した土器は、古墳の周溝から出土した土師器5点(1~5)と、流土中から出土した須恵器1点と土師器2点(6~8)、さらに古代の須恵器4点(9~12)の12点である。

周溝から出土した土器は、いずれも風化で器面が荒れて調整が不明瞭である。全体がわかるまで図上で復元できたのは、丸い胴部から小さな底部が突出し、頸部に突帯を貼り付ける有段口縁の壺(1)である。口縁部片のみではあるが、二重口縁壺(2)もある。丸い胴部にハケ調整のもの(3)は頸部から上がなく、どのような口縁になるかは不明である。甕は口縁から胴部上半までが残り、口縁端部の肥厚が特徴的な布留甕(4)である。肥厚も痕跡程度となり、長胴化しているもので、布留甕でも比較的新しいものと考えられる。小型器台と考えられる脚(5)もある。これら周溝から出土した5点の土器は古墳時代前期のもので、旧来の北陸の編年では古府クルビ式とされているものである。

流土中から出土した土器のうち須恵器は、北陸では出土例が少ない、無蓋高坏(8)である。陶邑型式のTK208に併行すると考えられる。坏部に二条の凸帯を巡らし、その間に櫛描波状文(櫛7本)を



第22図 B区出土土器(縮尺1/4)

巡らす。脚に長方形の透かしを四方向にあける典型的な器形であるが、この器種に特徴的な坏部に付く小さな把手が見当たらない。同様の須恵器が福井市太田山古墳群でも出土しており、こちらも弥生時代から古墳時代前期の古墳群のなかで、遺構に伴わず出土していることが注目される。土師器は、完形に近い短頸壺と無頸壺がある。短頸壺(6)は最大径がやや上にある丸い胴部に、大きめの頸部からわずかに外反する短い口縁をもつ。無頸壺(7)は丸い胴部の小さくなった頸部から口縁がわずかに立ち上がる。短頸壺は、須恵器の高坏と同じ時期に類例を求めることができる。無頸壺は、この時期には類例が乏しく、弥生時代後期の可能性も考えた。しかし、弥生時代のものより全体にやや大きく、内面に輪積み痕を明瞭に残しており、胎土・色調などが短頸壺と似ていることから同時期であると判断した。

古代の須恵器は、摘みのある蓋2点(9・10)と高台坏(11)、無台坏(12)の4点である。

第3表 B区出土土器観察表

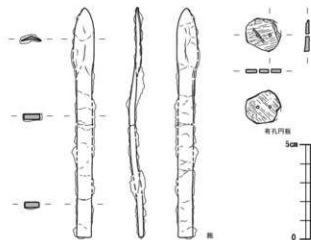
検出番号	器種	器形	口徑 底徑 (cm)	残存高 (cm)	調 整	色 調		焼成	胎土	備考
						外面	内面			
第22図 1	土師器	壺	(17.2) (5.0)	35.2	外) 体部：ハケ 内) 体部：ハケ	にぶい褐色	褐色	やや不良	②	
第22図 2	土師器	壺口縁	22前後	(3.3)	内外面：磨滅により調整不明	にぶい褐色	にぶい褐色	やや不良	②	
第22図 3	土師器	壺胴部	4.8	25前後	外) 胴部：ハケ。体部～底部：ハケのちナデ 内) 磨滅により調整不明	にぶい赤褐色	にぶい褐色	やや不良	②	
第22図 4	土師器	壺口縁	16.2	(16.2)	外) 胴部～体部：ハケ 内) 口縁部：ナデ 蓋部：磨滅所見 体部：ヨコナデ	褐色	にぶい褐色	良好	①	
第22図 5	土師器	器台脚	10.6	(6.3)	内外面：磨滅により調整不明	明褐色	明褐色	良好	①	
第22図 6	土師器	短頸壺	9.3	10.9	外) ナデ 内) 口縁部：ハケ後ナデ 体部：磨滅所見	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	①	
第22図 7	土師器	無頸壺	(6.5)	10.5	外) 胴部により調整不明 内) 磨滅所見	褐色	にぶい褐色	良好	①	
第22図 8	須恵器	無蓋高坏	18.5 13.0	13.1	外) 8条の輪積み状文+1条の沈線 坏部底部：ケ スリのみナデ 蓋部：四方の透かし 内) 口縁部：1条の沈線	灰色	明黄褐色	良好	②	内外面自然 輪付着
第22図 9	須恵器	坏蓋	(7.6)	2.5	外) 回転ヘラ切り後ナデ調整 内) 回転ナデ調整	灰白色	灰白色	良好	①	
第22図 10	須恵器	坏蓋	14.5	2.4	外) 回転ヘラ切り後ナデ調整 内) 回転ナデ調整	灰白色	灰白色	良好	①	
第22図 11	須恵器	坏B	13.2 10.0	3.7	外) 体部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り後ナデ 内) 体部：回転ナデ 底部：ナデ スノコ状牙痕あり	灰色	灰色	良好	① ⑤	
第22図 12	須恵器	坏A	(14.6) (10.9)	4	外) 口～体部：回転ナデ 底部：回転ヘラ切り後ナデ 内) 口～体部：回転ナデ 底部：ナデ	灰色	灰色	良好	① ⑤	

2 その他の遺物(第23図)

その他の遺物は、41号墳の副葬品とみられる鉈と遊離遺物の有孔円板がある。

鉈 刃部は鋸状で、裏透きを施し断面V形となる。表面の錆は錆のため明瞭ではない。身部は断面長方形で、直線的であるがスプーンの柄のように緩やかに湾曲する。計測値は、全長12cm、刃部長3.3cm、刃部最大幅1.1cm、身部長8.5cm、身部幅0.8cm、身分厚0.3cmである。

有孔円板 滑石製で、中央付近に二孔を穿つ。計測値は、径約1.85cm、厚さ概ね2mm、最大厚2.5mmである。



第23図 その他の遺物(縮尺1/2)

第4節 その他の遺構と遺物

A区(44号墳)の2次的に移動した盛土中、B区(41号墳)下層に残存する旧表土層中から縄文時代の土器・石器が採集された。その他B区では土坑が確認された。以下、遺構・遺物の順に詳述する。

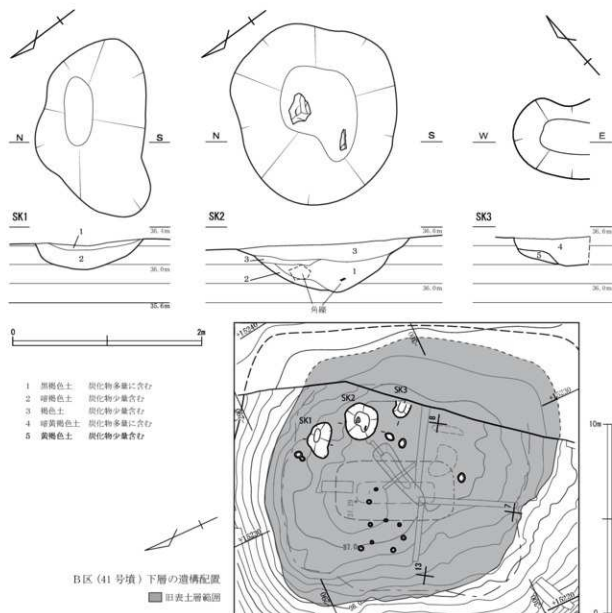
1 遺構(第24図)

B区に大小の土坑を複数確認した。それらのうち小規模なものは、いずれも深さが0.1m以下の僅かな落ち込みであり、遺構と判断し難い。規模の大きな3基について北から順にSK1~3とした。

SK1 東西に長い歪な楕円形で、長径約1.9m・短径1.1m前後、深さ約0.3mである。

SK2 歪な円形で、東西約1.85m・南北1.7m前後、深さ約0.6mである。土坑底面付近に0.3×0.2m大の角礫と0.2m大の板石があるが、必ずしも意図して配置したことを示す検出状況とは言えない。

SK3 東側が調査区外となる。東西に長い楕円形で、長径0.7m以上・短径0.8m、深さ0.3mである。



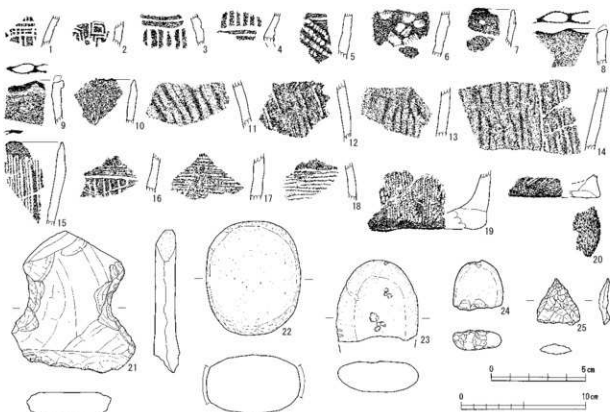
第24図 B区(41号墳)下層の遺構と旧表土層の範囲(縮尺1/40・1/200)

2 縄文時代の遺物(第25図)

遺物には縄文土器と石器がある。土器は、小破片がコンテナ約1箱分出土した。所属時期は中期前葉と晩期後葉の2時期である。有文土器・口縁部片を中心に抽出し掲載した。石器はほぼ図化掲載した。

1～4は半隆起線文により文様を描出する中期前葉の新式系に属す。1は半隆起線文上に刻み状の細線が残る。2は幅の狭い半隆起線により、幾何学状の文様を描出する。5は半截竹管文により文様を描出し、節が細長い縄文を施す中期前葉の船元式系に属す。6・7は無文土器で所属時期は不明である。6は内部に多条の線条痕が残る押圧をまばらに施し、器面の凸凹が顕著である。7は内外面ともにナデを施す。口辺部に斜上方からの円形刺突を施す。8～15は縦位条痕を密に施す晩期後半の糞置式に属す。口縁部には横位ナデによる無文部の有(8～10)、無(15)がある。16～18は横位条痕を主体として施す土器で、糞置式に後続すると考えられる。二枚貝あるいは類似工具による条痕文を施す。19・20は底部片である。19は胴部に縦位擦糸1を施す。20は縦位条痕が認められる。19は1～4、20は8～15と時間的に併行する。

21は側縁に抉りをもつ銅形を呈す打製石斧である。使用による刃部折損後、破断面に新たに刃部を作出する。刃部表裏面には使用による磨耗痕が認められる。基端面・裏面に自然面を残す。22・23は楕円礫を素材とする敲石である。敲打痕は22が周辺部にのみ、23が周縁部・表面に認められる。いずれも顕著な磨痕は認められない。24は打欠石錘である。下半部を折損する楕円礫を用いて、器体長軸両端部に剥離と敲打により紐掛部を作出する。25は基部に湾入がない平基鏃であり、平面が正三角形に近似する。やや厚手の薄片を素材とする。断面形は器体中央でゆるやかに内湾する。左側縁の調整は顕著ではない。右脚部先端も調整が顕著ではなく、厚みをもつ。



第25図 縄文時代の遺物(縮尺1/3・25のみ1/2)

第4表 石器観察表

図版番号	図種	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	保存状況	備考
第2508 21	打製石斧	B区 41号墳下層(印表土層)	11.1	9.8	2.0	261.7	安山岩	定形	刃部欠損後、再作出
第2508 22	磨石	B区 41号墳下層(印表土層)	9.0	7.5	4.6	512.1	安山岩	定形	使用面は縦縁部のみ
第2508 23	磨石	B区 SK02土層	6.4	6.4	2.4	158.2	砂岩	下半部欠失	使用面は表面・左辺部
第2508 24	石鐮	B区 41号墳下層(印表土層)	4.0	3.9	1.6	31.85	安山岩	定形	
第2508 25	石鐮	B区 41号墳下層(印表土層)	2.4	2.3	0.5	2.7	チャート	定形	

第5節 小結

平成14・15年度のA・B区の調査では、41～44号墳とそれに伴う祭式土器、古代の須恵器などを検出した。また、41号墳下層と44号墳上掘乱土中から縄文土器・石器などが確認された。

B区の41～43号墳は、調査前から墳丘を確認できる状態であった。41号墳は、方形に近い長方形で、規模19.6×18.6m・残存高約1.5～3.5mである。墳丘南北裾に幅約2mの溝が沿う。埋葬施設は検出できていないが、墳丘断面図から構築墓壇の範囲5.5以上×3.1m・深さ約0.5m、棺の下端での規模約4×1.1mと復元できた。鉢1点を棺に直交する向きで棺上方に副葬する。造営時期は、墳丘造営法や重複関係などから古墳時代前期前半(前Ⅰ～Ⅲ期)＝3世紀中葉～後半と考える。

42号墳は、円形で東側に削り残しの陸橋がある。墳丘規模は径13.4～14.6m・残存高約0.75～4.5m、溝幅1.8～3.5mである。埋葬施設は削平により残存しない。造営時期は、溝内出土の祭式土器が堀縄年の長泉寺4・5(古府クルビ1・2)式期の範疇とみられるため、古墳時代前期中葉(前Ⅲ～Ⅳ期)＝3世紀後葉～4世紀前葉となる。墳丘の重複関係も41号墳より後出であることを示す。

43号墳も正しく検出できていない。墳形は歪な円形で、墳丘規模は径8.5～9m・残存高約0.25～3m、溝幅0.7～1.8mである。埋葬施設は削平のため残存しなかったようである。造営時期は、近接して一部重複する状況から、42号墳より後出であるものの大きさは隔たらないと考えられ、おおまかに古墳時代前期中葉～後半代(前Ⅳ期以降)＝4世紀代に位置付ける。

A区の44号墳は、削平され盛土が残存せず、墳丘北側に溝が(再)掘削され排土が墳丘上に二次的に積まれる。これらは植林による一連の改変であろう。墳形は方形、墳丘規模は一辺約13m・残存高1～1.5mである。造営時期は概ね42号墳と同時期(古墳前Ⅲ～Ⅳ期)とみられる。

これらは古墳時代前期の前半・中葉・後半の3時期に造営された古墳であり、時期を追って弥生時代以来の方形を主体とした墳丘から円形の墳丘が造られていく状況が示される。

縄文時代の遺物は、A区では二次堆積土中に僅かな細片が混入する程度で、A区に包含層が展開したとしても遺物量は希薄なものとみられる。B区では縄文時代中期前葉と晩期後葉を所属時期とする多くの土器・石器が出土した(取り上げ点数645点)が、図示し得たものは少ない。ここで確認された土坑は、多くの遺物が出土したにもかかわらず遺物の分布しない箇所に偏在しており、包含層上から掘り込んだことが明らかであるため、弥生時代から41号墳造営までの所産とするのが妥当である。

参考文献

- 堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年―北陸南西部を中心に―」『朝日山』朝日町教育委員会
 堀 大介 2006 「越前・加賀地域」『古式土器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
 古川 登 2003 「北陸地方における古墳の出現」『風巻神山古墳群』清水町教育委員会
 大賀克彦 2002 「凡例 古墳時代の時代区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会

第4章 平成16年度（C区）の調査

第1節 調査の概要

平成16年度はC・D区の調査を実施した。しかし、D区の調査は一部を残して中断し、残りを平成21年度に実施した。そのため、D区はまとめて次章で報告し、ここではC区の調査成果を報告する。

調査区は、北西へ下降しつつ延びる尾根の標高約22～33.5mの部分にあたり、最高所と西側の田面との比高は約23mである（第2図）。調査区内には、その最高所付近を基点とした国土座標軸に基づく10m間隔の区画を任意的に設定した（第26・27図）。調査前には、自然崩落や人為的な改変により、2か所程度の歪な平坦面が確認されるのみであったが（第26図）、調査の過程で3基の墳丘墓の存在を確認した（第27図）。調査にあたり各墳丘に十字方向のセクションベルトを設定して、墳丘検出から墓壇プランの確認まではそれを基準軸とした。墓壇内の検出作業に際しては墓壇ごとに基準軸を設定し直した。棺内埋土と木棺材置換土の判別が困難なため、裏込土のみ残すことで棺の完掘とし、最終的に裏込土を除去して墓壇内を完掘した。なお、墓壇埋土は採取し洗浄したが、遺物は確認されなかった。

第2節 遺構

確認した遺構は墳丘墓3基である。いずれも墳丘の流出が激しく、近現代の山道による破壊を被る。山道の脇に盛り上げられた掘削土が二次的に流出し、現状での墳丘の確認を困難なものとしていた。なお、調査時には天神山古墳群中の一部を除き号数が付されていなかったため、上方から1～3号墓と仮称していた。以下、踏査結果（第2章第3節）を踏まえて天神山（支群）27～29号墓とする。

1 27号墓（第29～31図）

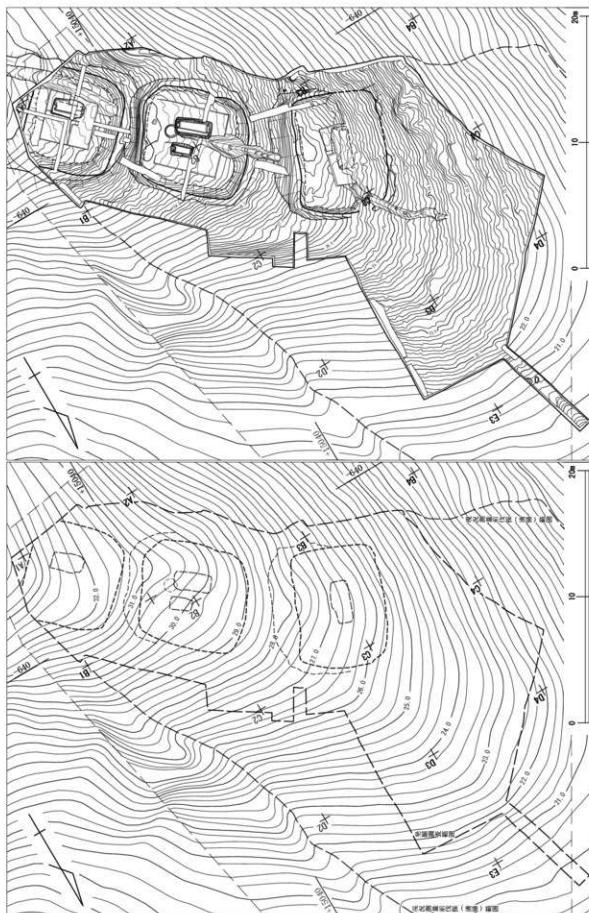
27号墓は、調査区東端の標高約31～32.5mに位置する。墳丘の一部が調査区外となるが、全形を窺い得る。また、墳頂を覆う上方からの流土が少なく、墳頂面のほぼ直上から古代の須恵器片が出土することから（第49図）、該期における削平・利用が窺える。ただし、それに関わる遺構は確認されない。

墳丘 墳形は尾根筋に直交する北東―南西を長軸とする長方形である。規模は長軸8m・短軸7.3m、墳丘残存高は北西側約1.6m・南東側約0.15mである。墳丘周囲には幅0.4～1.3mの平坦面が巡る。

墳丘の造成は、基底面を地山から削り出すとともに墳丘裾を整形し、大半を盛土により形成する。墳丘盛土は厚さ0.2～0.4mが残存する。なお、墳丘南東辺は溝状になるが墳丘基底面を掘り込んではいない（第30図）。祭式土器は高環形土器、甕形土器、壺形土器（第46図1～3）などがある。（以下、「形土器」省略）いずれも細片となり、墳丘南東辺から十数点が出土したほか、墳丘周囲の流土中から出土した（第28図）。とくに高環（1）の出土位置は破片が墳丘周辺の比較的広範囲にわたって確認された。

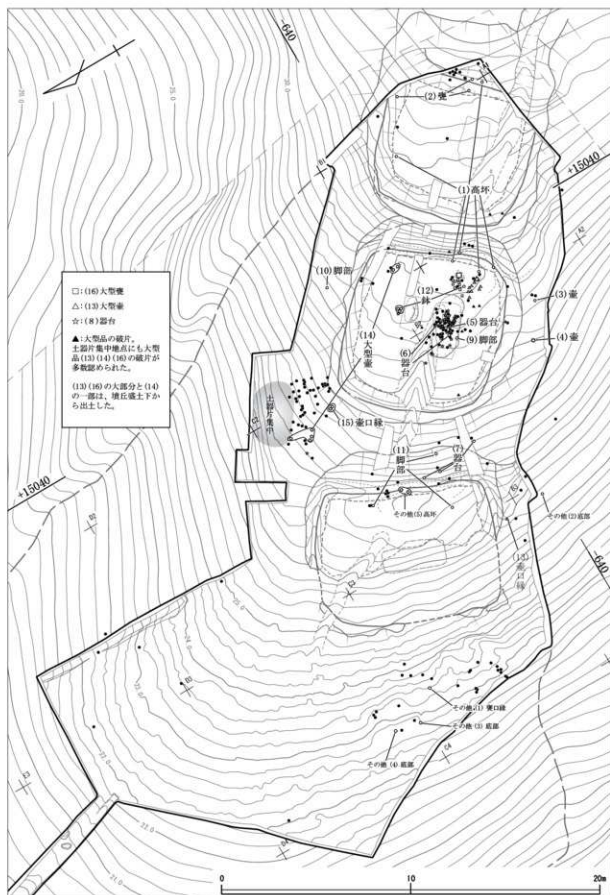
埋葬施設 墳丘盛土下にて1基を確認した。位置は墳頂平坦面の中央から南に偏在し、墳丘長軸に直交して配置される。埋葬施設陥没坑は、古代以降の改変のために把握し得なかった。墓壇は、歪な長方形で、規模は長軸約2.5m・短軸約1.5m・検出面からの深さ0.1～0.3m前後である。墓壇底は僅かながら南東側が高い。

木棺は、棺材が残存しないものの、墓壇内の堆積状況から部分的に木棺痕跡を確認し得た。棺形式はH形の組合式箱形木棺とみられる。長側板は、それぞれ墓壇壁から0.1～0.3m内側に立てられ、その間隙に硬く締まる裏込土が充填される。木棺規模は、両小口外法間1.9m、長側板中央付近での外法幅約



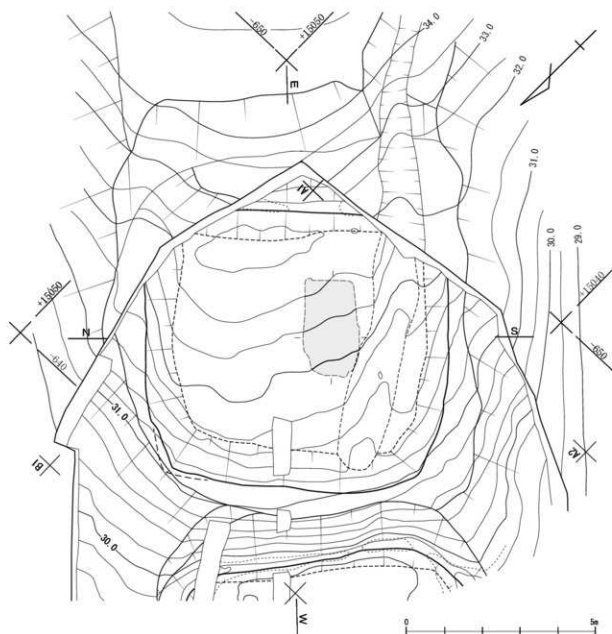
第27図 C区 埋葬施設（木棺痕跡）検出時の状況（縮尺1/300）

第26図 C区 調査前の状況（縮尺1/300）



第28図 C区 土器出土地点(縮尺1/200)

※須恵器の出土地点は第49図に提示。



第29図 27号墓 墳丘検出状況 (縮尺1/100)

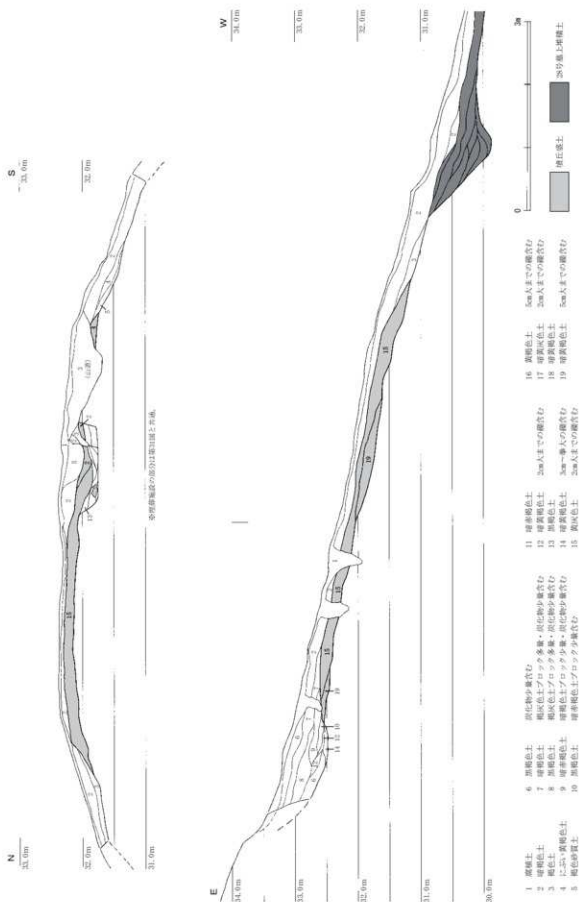
0.5mである。副葬品などは確認されなかったが、棺内中央よりやや東にて墓壇底から0.1m程度浮いた状態の0.2m大の角礫を検出した。この角礫は、その位置から木棺の腐朽により棺内に落ち込んだものであり、本来は棺が見えなくなる程度埋設した後、もしくは棺埋設後・墳丘盛土前の段階に置いたものである。この角礫が被葬者の上半身側に置かれたと解釈すると、被葬者頭位は南東となる。

造営時期は、出土した祭式土器から風巻2（月影2）式期と捉えられる。

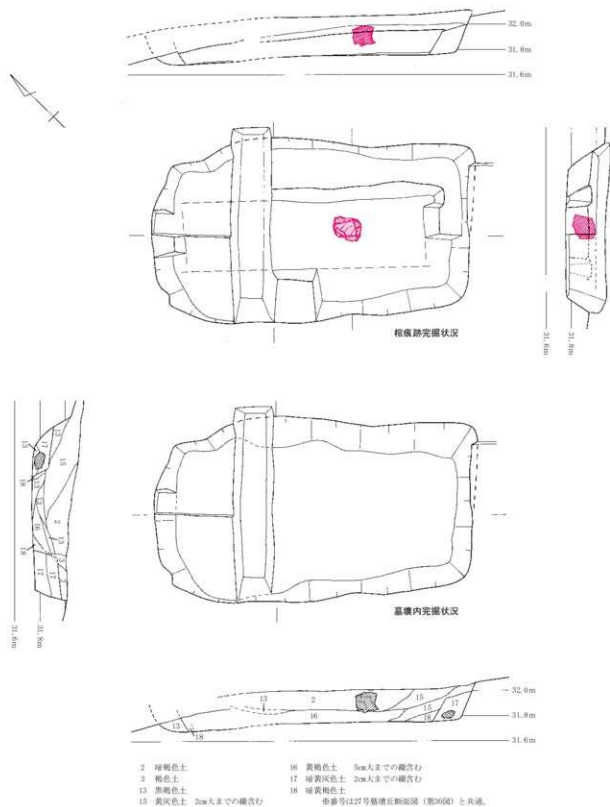
2 28号墓（第32～41図）

28号墓は、27・29号墓間の標高約28.5～30mに位置する。28・27号墓の墳丘間は1.5～3mであり、28号墓造営時に27号墓北西の平坦面を一部破壊している。28・29号墓の墳丘間は4～5.5mと離れており、両者はともに影響しない。なお、近現代の山道は墳丘中央を縦貫し、地山を大きく掘り込んでいる。

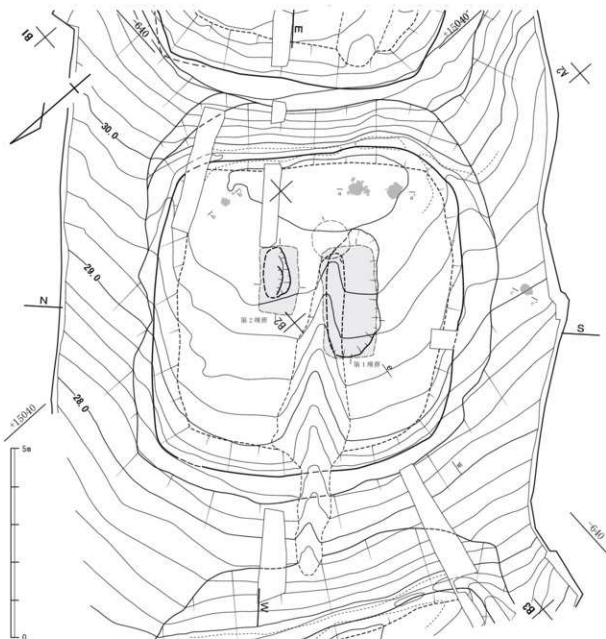
墳丘 墳形は南東－北西を長軸とする長方形である。規模は長軸8.5m・短軸8m、墳丘残存高は北



第30図 27号基 墳丘断面および堆積状況（縮尺1/60）

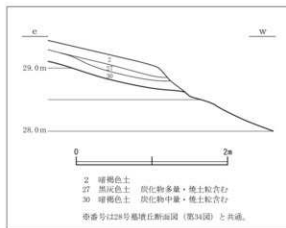


第31図 27号墓 埋葬施設（縮尺1/30）

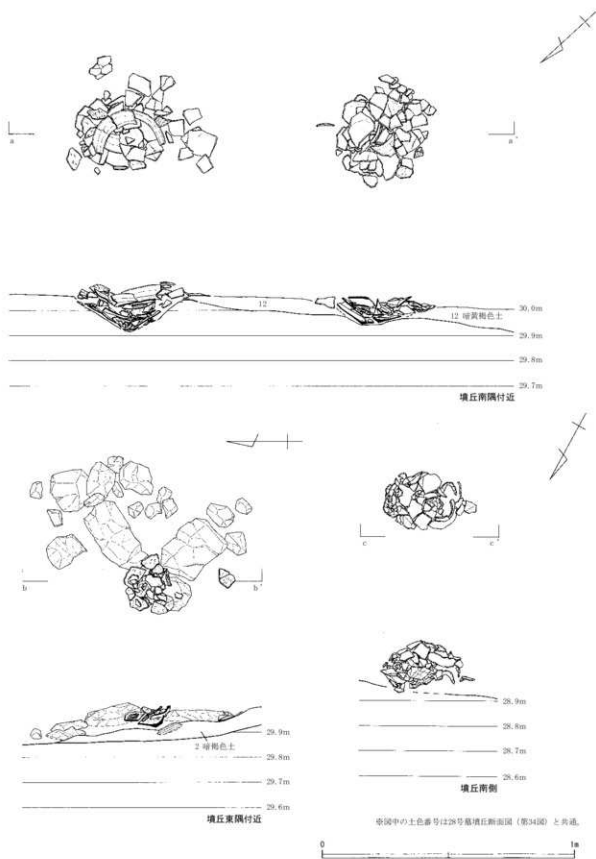


第32図 28号墓 墳丘検出状況（縮尺1/100）

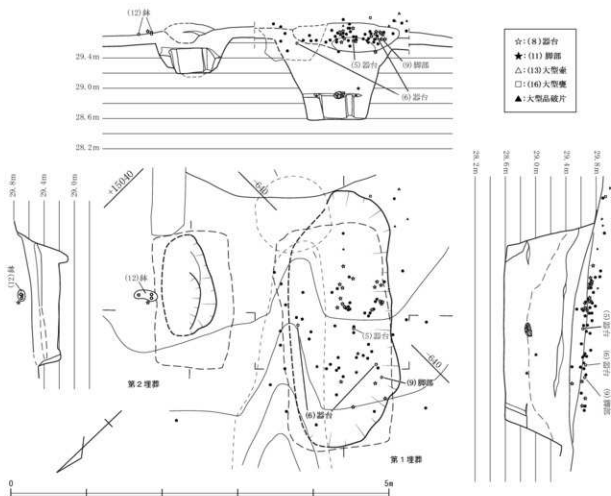
西側約1.6m・南東側約0.25mである。墳丘周囲には幅0.4～1mの平坦面がめぐる。墳丘の造成は、基底面を地山から削り出して、部分的な盛土により墳丘裾を整形し、最終的に墳丘の大半を盛土により成形する。墳丘南東は基底面を掘り込む溝により区画・成形する。溝は総延長約11m・下端幅0.2～0.5m・基底面からの深さ約0.1m・東側上端からの深さ約1mである。その溝の底面は墳丘周囲の平坦面と一連のものとなる。墳丘盛土は厚さ0.2～0.5m程度が残存する。盛土の状況が



第33図 28号墓 墳丘西側盛土状況（縮尺1/60）



第35図 28号墓 墳丘周辺土器出土状況（縮尺1/15）



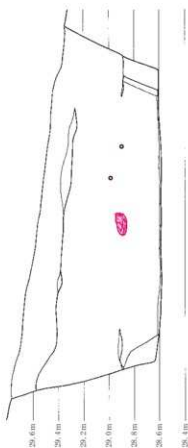
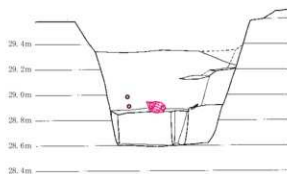
第36図 28号墓埋葬施設上土器出土地点 (縮尺1/50)

比較的良好に確認される墳丘北西側は、3層の盛土が水平積みされている。中・下層(27・30層)には炭化物が多く含まれ、僅かに焼土粒も認められる。なお、墳丘東隅付近の盛土中に0.05~0.3m大の角礫が集中するが、地山中に含まれる石材であり、意図して組まれた状況ではない。

祭式土器は、墳頂と墳丘周辺、墳丘盛土下から出土した(第28図)。墳頂の祭式土器は、第1埋葬施設陥没坑内と第2埋葬施設北脇から出土した。第1埋葬施設陥没坑内からは80片前後の細片が出土したが、図上にて全容を窺い得るのは器台(8)のみである。いずれも散乱した状態で出土した。第2埋葬施設北脇には鉢(12)の破片がまとめられていたが、一片のみ器台(8)の破片がある。また、鉢(12)は他の一片が盛土下的大型壺(第47図13)・大型甕(第47図16)の間から出土した。

盛土下の祭式土器は、埋葬施設の構築面上にまとめられ、最終的に盛土下に埋め込まれたものである。盛土下の墳丘南隅付近には大型壺(13)と大型甕(16)が並べて据えられたような状態であった(第35図)。ともに構築面を掘り込んで底部を差込み、口縁を上にしてまとめられるが、底部の一部や体部などの破片が足りない。盛土中の墳丘東隅付近からは大型壺の頸部突帯と底部(第47図14)が確認された。

墳丘周辺の祭式土器は特に北側に集中する。細片が多いが、大型壺(14)と同一個体とみられる口縁部片をはじめ、多くの大型器種の体部片も出土した。また、墳丘北西側の流土中に含まれた脚部(11)の破片は、第1埋葬施設内出土の破片と同一の個体を成すことを確認した。本来、第1埋葬施設上にあったものが、山道掘削の影響により転落したものである。これらの出土状況、とくに盛土下の土器の状

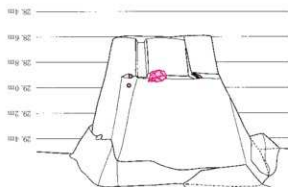
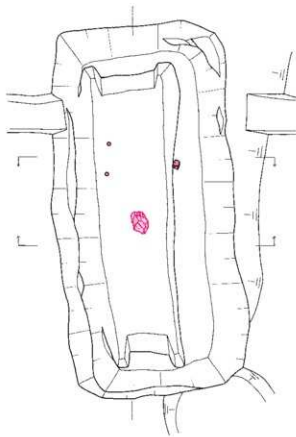


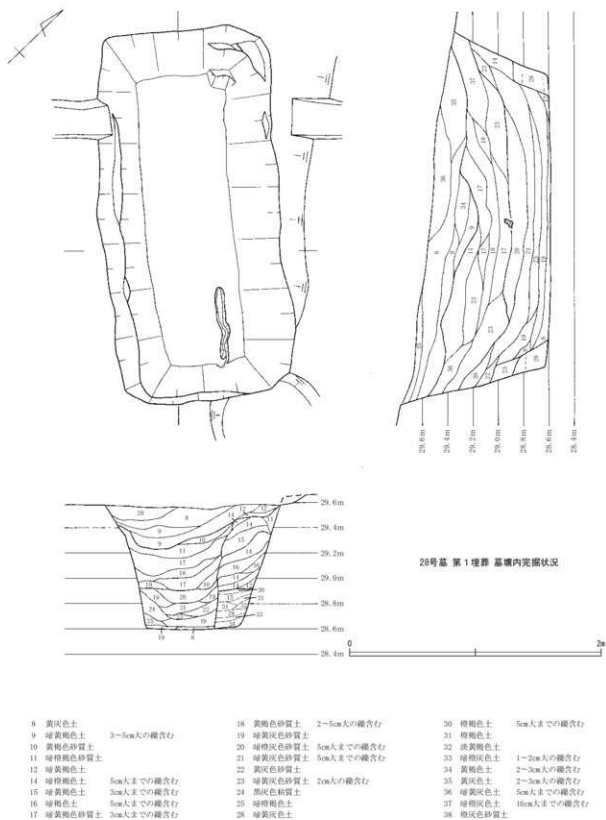
28号墓 第1埋葬 棺底跡完掘状況

● 土器破片
● 角礫



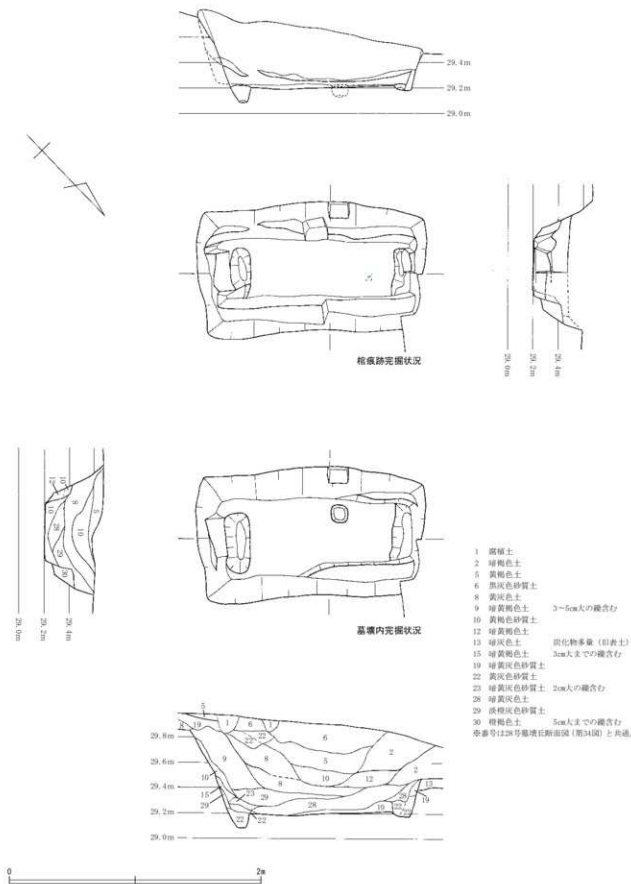
第37図 28号墓 第1埋葬施設①（縮尺1/30）





※番号は28号墓横断面図(第34図)と共通。

第38図 28号墓 第1埋葬施設② (縮尺1/30)



第39図 28号墓 第2埋葬施設（縮尺1/30）

況は他所で破砕したものを再配置したことを示す。また、木棺裏込上から土器片が出土したため、木棺埋設以前に破砕行為のなされたことがわかる。破砕場所は、土器が集中する墳丘北側の比較的傾斜の緩やかな部分であろう。そして、各所に再配置した後の残余も、ここに集積・廃棄されたようである。

埋葬施設 墳丘盛土下から2基検出した。ともに墳丘と同じ南東―北西方向を長軸とする。墳丘中央に寄せて配置され、墓壇南東小口の位置が揃えられている。以下、検出順に第1埋葬・第2埋葬とする。

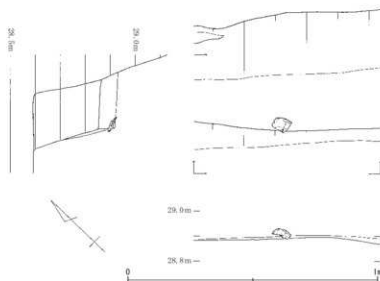
第1埋葬は南側の埋葬施設である。撓乱のため一部不明瞭ながら埋葬施設陥没坑を検出した。平面形は歪な長楕円形で、規模は長軸3.4m・短軸1.3m前後・深さ0.3m前後である。内部には祭式土器片が落ち込んでいた。墓壇は長方形で、規模は長軸約2.9m・短軸約1.4m・深さ0.8～1.2mである。

木棺は、棺材などが残存しないものの確認された痕跡によるとH形の組立式箱形木棺である。南西側の長側板は墓壇壁に沿わせているが、北東側の長側板は墓壇壁から0.25m前後離して立てており、その間隙に裏込土を充填する。そのため、木棺は墓壇内の南西に偏在する。木棺規模は、両小口外法間1.9m・北西外法幅約0.55m・南東外法幅0.45mであり、長側板の長さは約2.2mである。土層断面観察による両小口部分の裏込土の状況から、棺の高さは少なくとも0.4m程度とみられる。

副葬品は確認されなかったが、棺内のほぼ中央にて、墓壇底から約0.35m浮いた状態の0.2m大の角礫を検出した。その検出位置から、墓壇を埋め戻した後、墳丘盛土を施す以前に置いたものとみられる。また、木棺の北東側裏込土上に円孔のある高坏あるいは器台の脚部破片を検出した。この他、墓壇埋土中から2片の土器小片が出土したが、これらは墓壇上に置かれた礫とともに落ち込んだものとみられる。これらの墓坑内から出土した土器片は、上記のように墳丘北西出土の破片と脚部(11)として部分的に接合することを確認した。しかし、裏込土出土破片が保管中の悪条件のために粉砕され、出土時の形状に復することが不可能となり、すべてを接合することができなかった。

被葬者頭位は、木棺の幅が広がること、墓壇底面が僅かに高くなること、土器片の検出された位置などから北西側と推測される。

第2埋葬は北側の埋葬施設である。墳丘に設定したセクションベルト下に大半が隠れていたために確認が遅れ、墳丘断ち割りトレンチによって墓壇北西側の一部を破壊することとなった。また、埋葬施設



第40図 28号墓 第1埋葬 木棺裏込土器出土状況(縮尺1/150)



第41図 28号墓 第2埋葬 管玉出土状況(縮尺1/3)

陥没坑は北東側の大半を失ってしまった。検出し得た部分から推測される陥没坑は、歪な楕円形で、規模は長軸1.3m以上・推測される短軸0.7m程度・深さ0.25m以上である。墓壇は長方形で、規模は長軸約1.8m・短軸約1m・深さ0.35～0.55mである。なお、墓壇底の中央やや西側に、円形あるいは略方形を呈する径0.15m・深さ0.08mの土坑があり、その埋土中に若干の炭化物・焼土細粒が認められた。

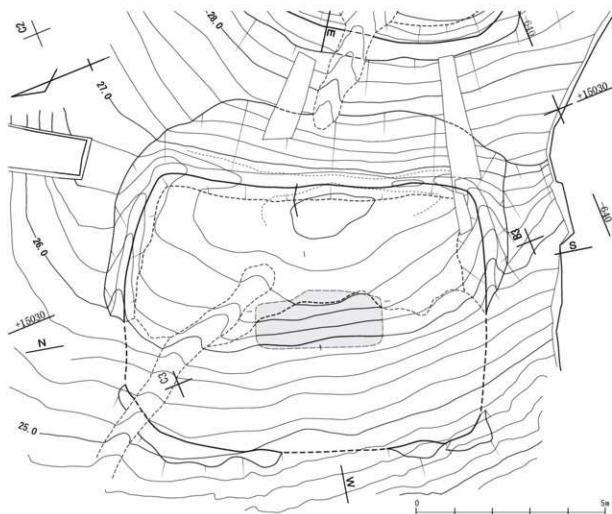
木棺は、棺材などが残存しないものの確認された痕跡によるとH形の組合式箱形木棺である。墓壇底面の両小口部分には小口板を据えたと思われる浅い窪みがある。長側板は墓壇壁からそれぞれ0.1m程度離して立てられ、その間隙に硬く締まる裏込土が充填される。木棺規模は、両小口外法間1.3m・外法幅約0.45mであり、長側板の長さは1.4～1.5mである。

副葬品は、棺内から管玉2点を検出した。2点の管玉は、ともにほぼ墓壇底面に接しており、棺内北西側に偏在する。これにより被葬者頭位は北西と見られる。その他、墓壇上に遺物は認められなかったが、上述のように墳頂部の墓壇北脇にて径約0.2mの範囲に一個体の鉢（12）片がまとめられていた。第1埋葬墓壇上面の土器群に対応する、第2埋葬の被葬者に対する祭式土器と考えられる。

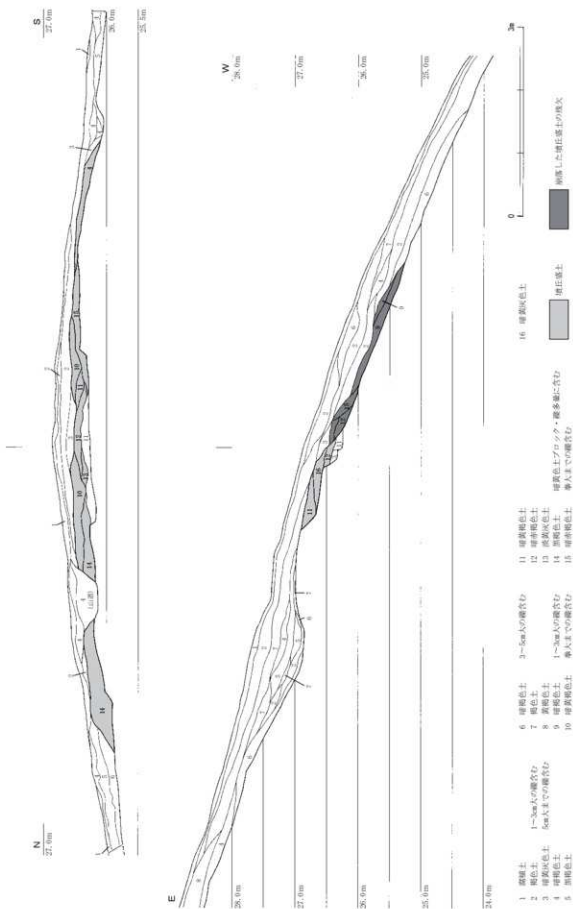
28号墓の造営時期は、風巻2～3（月影2～3）式期の範疇であり、27号墓より後出である。

3 29号墓（第42～44図）

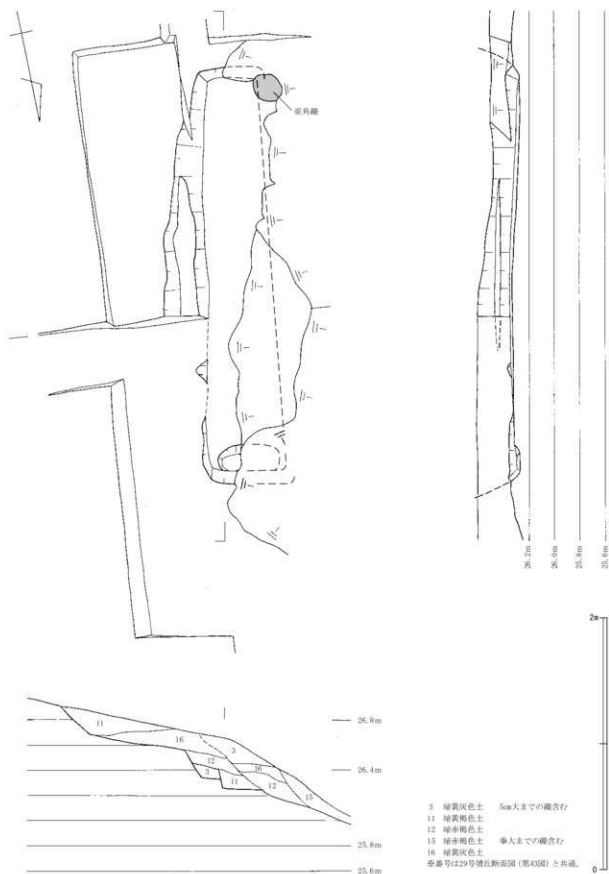
29号墓は、標高約25～27mに位置する。尾根がやや北に屈曲する部分に立地し、南西斜面が迫るた



第42図 29号墓 墳丘検出状況（縮尺1/100）



第43図 29号墓 墳丘断面および堆積状況(縮尺1/60)



第44図 29号墓 埋葬施設（縮尺1/30）

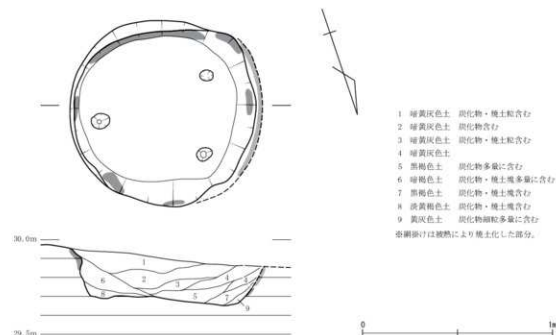
め墳丘の大半が崩落・流失する。なお、崩落後に須恵器などの破片が集積するが、これに伴う遺構は確認されていない。また、墳丘上を通過する近現代の山道は、崩落後の二次堆積土上に開削されている。

墳丘 墳丘は著しく流失し、西側の大半を失う。しかし、墳丘周囲をめぐる地山削り出しによる平坦面が部分的に残存したことにより、墳丘の全形が窺い得る。墳形は北北東-南南西を長軸とする長方形である。規模は長軸9.5m前後・短軸約7m、墳丘残存高は西側で約2m・東側で約0.2mである。墳丘西側に残る平坦面は幅0.5m前後である。墳丘の造成は、地山削り出しにより基底面や墳丘裾を整えて、大半を盛土により成形したようである。墳丘東側は溝を掘り込んで墳丘を区画・成形する。溝は総延長約14.5m・上端幅約1～2.5m・下端幅0.2～0.4m・東側上端からの深さ約1mである。墳丘盛土は厚さ0.1～0.4m程度が残存するが、墳丘東側には盛土がほとんど認められない。また、墳丘西側に残るのは墳丘の崩落に伴い二次的に移動した盛土の残欠である。29号墓に伴う祭式土器は確認されない。

埋葬施設 墳丘盛土下に確認した。位置は墳丘のほぼ中央であり、墳丘長軸に一致する方向性で配置される。墓壇東半の壁面から底面にかけて部分的に残存するにすぎないが、土層断面観察から、墳丘盛土前に旧地形の斜面を整備して墓壇を掘り込んだことや木棺裏込土の状況などが確認できる。墓壇規模は長軸3.3m・短軸0.9m以上・深さ0.3m前後である。墓壇南西側の地山に含まれる0.3m大の亜角礫（第44図・図版第4-8）が木棺を据える際に障害となるため、棺幅はその礫にかからない規模となる。長さは3m程度とみられる。墓壇北側小口に浅い窪みがあり、小口板を据えた痕跡と認識するならば組合式棺形木棺となる。ただし、刳拔系の木棺を使用した可能性も払拭できない。副葬品は確認されない。造営時期は、弥生時代末～古墳時代初頭という位置付けになるものと考えられる。

4 その他の遺構（第45図）

焼土坑 28号墓墳頂に径約1m・深さ0.25mの焼土坑がある。壁面の大半は表面から厚さ約1cmが焼土化している。第1埋葬の東小口側に位置し、墓壇および陥没坑と一部重複する。近現代の山道の直下に位置するが、その影響を受けないため、山道とは構築時期が隔たると言える。時期は特定し得ないが、周辺で9世紀代を中心とする須恵器が確認されていることから、古代の遺構である可能性がある。



第45図 焼土坑（縮尺1/20）

第3節 遺物

出土遺物は、墳墓群に伴う土器や副葬品のほか、直接遺構に伴わない帰属不明のものがある。以下、墳墓群の遺物とその他の遺物とに分けて記載する。

1 墳墓群の遺物（第46～48図）

墳墓群の遺物は、27・28号墓出土土器と28号墓第2埋葬副葬品の管玉がある。

27号墓出土土器（第28・46図1～3） 高坏（1）、甕（2）、壺（3）がある。高坏（1）は坏部が碗形で、中位に段を有するとみられる。甕（2）は有段口縁甕の口縁部から頸部の破片であるが、口縁部の大半を欠く。壺（3）は有段口縁で、口縁が外反して立ち上がる。高坏（1）が風巻2（月影2）式の範疇と判断される。他の遺物もその時期を下る要素はなく、27号墓の造営時期と捉えて大過ないものと考えられる。

28号墓出土土器（第28・36・46・47図） 器台（5～8）、器台または高坏の脚部（9～11）、鉢（12）、壺（4）・（13）～（15）、甕（16）がある。このうち器台（5・6・8）・器台または高坏の脚部（9）・鉢（12）は墳頂から、壺（13）～（15）・甕（16）は墳丘盛土下から出土した。

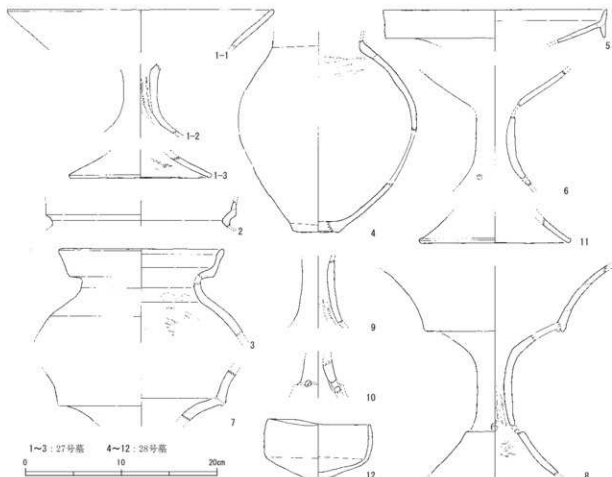
墳頂出土土器のうち鉢（12）以外は第1埋葬施設陥没坑内出土である。器台（5）は、口縁部を上屈曲し、その下端に粘土帯を貼り付けて口縁帯を形成する。器台（6）は受部と脚部の小片である。器台（8）は、受部・脚部とも有段で緩やかに外反しつつ伸びる。脚部（9）は小片で詳細不明瞭である。鉢（12）は、小さな底部から体部が直線的に開き、大きく屈曲して、口縁まで直立気味に立ち上がる。

墳丘盛土下出土土器は大型品である。壺（13）は、頸部が外反し口縁部付近で大きく広がる。口縁下端に粘土帯を貼り付け口縁帯を成し、外面に擬凹線を施す。頸部突帯表面には僅かにハケ原体による刺突が並ぶ。肩部は球形に近く、体部下半は直線的に伸び底部へ続く。体部・頸部外面には僅かにハケ調整が確認され、体部内面はヘラ削りである。壺（14）は、頸部突帯付近の破片と底部が墳丘盛土下から出土した。墳丘北側から壺口縁（15）も出土したが、（14）とは頸部径が合わない。甕（16）は有段口縁である。口縁は緩く外反しつつ小さく立ち上がり、外面に擬凹線を施す。頸部内の削り残り面に僅かにハケ調整が残る。体部は上半の最大径部分から狭い平底へ直線的に伸びる。体部外面はハケ調整、内面はヘラ削りである。底部は被熱のため赤変し、煤が付着する。

墳丘周辺出土土器は壺（4）・器台（7）・脚部（10・11）などがある。壺（4）は、根に包まれるように出土しており、体部は拉げている。口縁部を欠く。器台（7）は、有段の受部片であり、内外面にヘラ磨きが確認できる。脚部（10）は円孔の下に剥離痕があり、有段であったことを示す。なお、出土位置から27号墓に帰属する可能性もある。脚部（11）は一部が第1埋葬墓坑内から出土した。墓坑内出土の破片は円孔があり、段が見つからない（第41図）。この他、墳丘北側からは壺（15）や（14）をはじめとする大型器種の体部とみられる破片も多数確認された。（13）～（16）はいずれも外観的に似通った判別が困難だが、（13）・（16）に接合する破片が確認されており、複数個体の破片がまとめて廃棄されているようである。

器台（8）が風巻2もしくは3式（月影2～3式）の範疇と判断される。これが28号墓の造営時期を示すものであり、28号墓は27号墓より後出するものと考えられる。

管玉（第48図） 2点とも、28号墓第2埋葬の棺内西側より出土した。1は緑色凝灰岩製であるが、真っ白な色調である。側面の上下面付近に、形割の痕跡と見られる角が若干残る。片側穿孔のようである。2は緑色凝灰岩製で、色調は淡い緑灰色である。石質はやや脆く、母岩に由来する多数の微細な孔が見られる。片側穿孔を基本とするようであるが、穿孔が斜行したため、改めてやや小さい孔をずらして穿ち貫通させている。この2点の管玉は、径がほぼ同じであることや出土した状況から、一つの装身



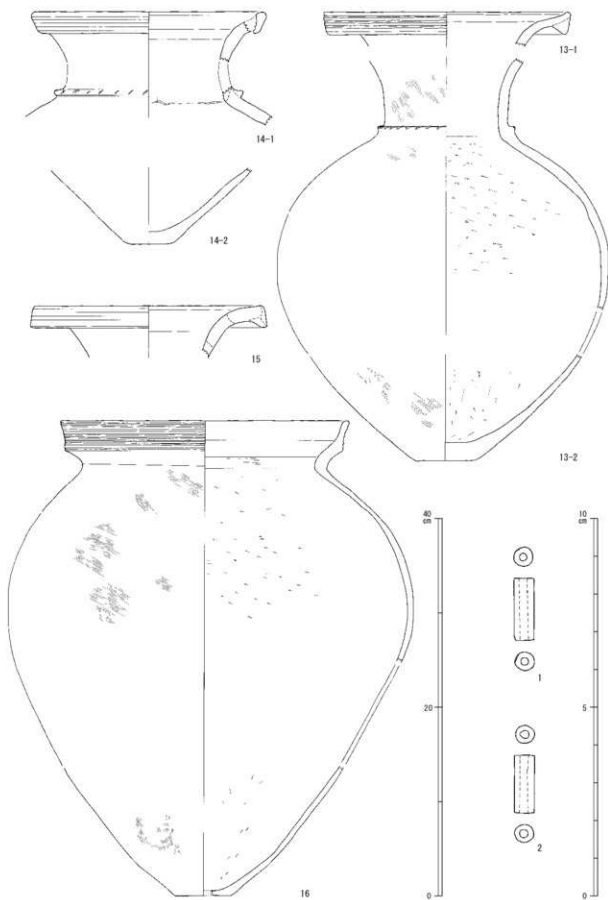
第46圖 墳墓出土土器① (縮尺1/4)

第5表 C区墳墓出土土器觀察表

調査番号	群種	出土地点	通長 (cm)		調整	色調	胎土	構成	備考
			口径	底径	底厚				
第46号1-1	群 A1	27号墓西一28号墓基上層	28.0	—	4.0	不明	褐色土	良	馬頭石層
第46号1-2	群 A1	27号墓西一28号墓基上層	—	14.6	2.3	不明	灰白色	良	馬頭石層
第46号2	群 A1	27号墓西一28号墓基上層	—	—	2.5	不明	灰白色	良	
第46号3	群 A1	27号墓西	17.0	—	(2.5)	(外)不明 (内)ヘラミズリ	褐色土	良	
第46号4	群 A2	28号墓西	—	5.0	(19.5)	(外)不明 (内)ヘラミズリ	灰白色	良	土坯による変形
第46号5	群 B1	28号墓西1層敷地施設状況	23.4	—	2.3	不明	灰白色	良	変形(1層部)
第46号6	群 B1	28号墓西1層敷地施設状況	—	—	(12.3)	不明	褐色土	良	変形(一部部)
第46号7	群 B2	28号墓南一北西	(19.6)	—	(5.5)	ヘラミズリ	(外)褐色 (内)灰白色	受部	
第46号8	群 A1	28号墓西1層敷地施設状況	(22.8)	(12.5)	(22.8)	不明	褐色土	やや良	西壁25点以上脱落 脚部4孔
第46号9	群 B1	28号墓西1層敷地施設状況	—	—	(6.1)	不明	灰白色	良	脚部1孔
第46号10	群 B1	28号墓北東	—	—	(3.7)	ヘラミズリ	(外)灰白色 (内)灰白色	良	脚部
第46号11	群 B1	A1-2 28号墓西一29号墓上層 28号墓西面南東部出土	—	16.0	(2.8)	不明	灰白色	良	西面南東のうしろに付く程度で傾斜したままの破片は、保管中の破片により、細孔と化した。しかし、他の破片に、細孔のいくつかのみにみられる破孔の痕跡とごとき、同一物体と見られる。
第46号12	群 A1	B1 28号墓西2層敷地施設状況 28号墓西面南東部出土	10.7	2.4	6.3	不明	灰白色	良	西2層敷地の破片として見つかった。一方、西面南東部敷地にあることから、破片した際に傾斜していることが分る。
第47号13-1	群 B2	28号墓西	26.0	—	(3.6)	不明	灰色	良	1層部のみ13点と確認がない
第47号13-2	群 A1	28号墓西面南東部出土	—	5.8	(46.7)	(外)ハタ (内)ヘラミズリ	(外)灰色 (内)灰白色	良	底面一部部一箇所にまとまり出土
第47号14-1	群 B1-2	28号墓西面南東部出土	24.0	—	(12.0)	不明	褐色土	良	1層部一部部
第47号14-2	群 B1	28号墓西面南東部出土	—	4.2	(8.0)	不明	(外)灰白色 (内)灰白色	良	通長不明、同一一点から断面変形付の破片が出土している
第47号15	群 B2	28号墓北	20.0	—	6.0	不明	灰白色	良	1層部のみ
第47号16	群 A1	28号墓西面南東部出土	30.2	(5.8)	(50.0)	(外)ヘラミズリ (内)ヘラミズリ	灰白色	良	底面片不 底面2箇所欠損

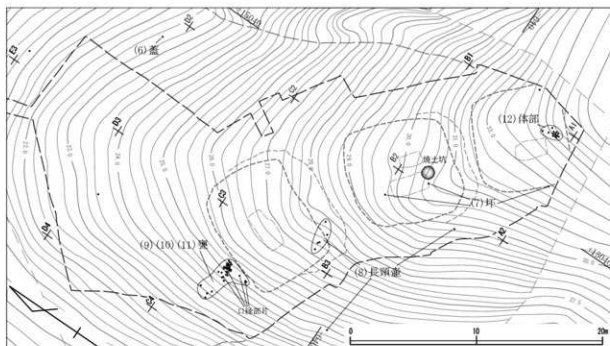
第6表 管玉觀察表

図面番号	器種	出土地点	保存状態	材質測 (mm, g)			穿孔	石材	色調	備考	
				長	幅	孔深					
第48図1	管水	28号馬場土持層	完好	16.20	5.05	2.65	0.73	片削	緑色燧石質	白色	彩面の彫刻が浅い
第48図2	管水	28号馬場土持層	欠損	14.80	4.80	2.10	0.58	片削	緑色燧石質	褐色	片削から2段階見える

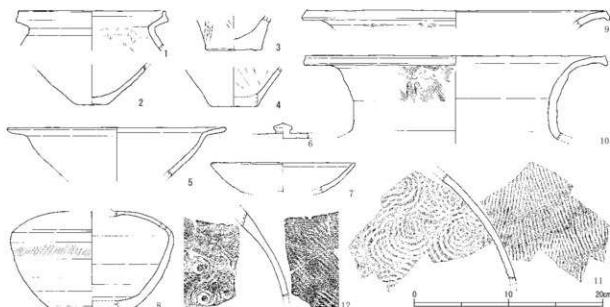


第47図 墳墓出土土器②（縮尺1/4）

第48図 28号墓 第2埋葬
出土管玉（縮尺1/1）



第49図 須恵器出土地点 (縮尺1/300)



第50図 周辺出土土器 (縮尺1/4)

第7表 C区 その他の土器観察表

図面番号	器種	出土地点	寸法 (cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
第50図1	甕	B3 南西斜面	15.5	—	(4.3)	(外)不明 (内)ナデ・ヘラケズリ	橙色	密	良	口縁部のみ
第50図2	底部	A3 調査区外	—	3.1	(4.2)	不明	浅黄褐色	やや粗	良	
第50図3	底部	C3 南西斜面	—	6.0	(3.6)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	にぶい橙色	密	良	
第50図4	底部	C3 南西斜面	—	5.0	(3.9)	(外)ヘラケズリ (内)ヘラケズリ	にぶい橙色	密	良	
第50図5	高坪	B2 29号墓上層 (山道内埋積)	23.0	—	(6.2)	不明	にぶい黄褐色	密	良	口部口縁
第50図6	蓋	D2 調査区外	—	—	(1.6)	ナデ	灰褐色	密	良	蓋部分
第50図7	坪	A1-2 29・32号墓埋積	15.2	—	(3.2)	回転ナデ	灰褐色	密	良	
第50図8	長須通	A2・4, B3 29号墓上層止溝	—	8.0	(10.4)	回転ナデ	黄灰色	密	良	蓋部欠失
第50図9	甕	B3 南西斜面	16.4	—	(1.8)	ナデ 流紋文	灰褐色	密	良	口縁部 10・11と同一胴体
第50図10	甕	B3 南西斜面	32.0	—	(8.4)	ナデ 流紋文	灰褐色	密	良	9・11と同一胴体
第50図11	甕	B3 南西斜面	—	—	(1.3)	ナデキ カキ目	灰褐色	密	良	9・10と同一胴体
第50図12	体部	A1・B2 29号墓埋積	—	—	(10.0)	ナデキ カキ目	灰白色	やや粗	不良	

※1～5：弥生土器 6～12：須恵器

具として副葬されたことが考えられる。

2 その他の遺物（第50図）

その他の遺物は、墳墓群の造営時期と異なる時期の土器のほか、調査区外採取の土器などである。甕（1）は未発達な有段口縁部片である。口縁部は内傾し、外面は無紋である。底部（2）は小さい底部から緩やかに体部が立ち上がる。底部（3）は全体的に分厚く、比較的広い平底で体部が強く立ち上がる。（4）は底の広さ、体部の傾きとも（2）・（3）の中間であるが、底面となる部分が残存しないため底部ではない可能性もある。高坏（5）はやや直線的な碗形の受部で、口縁部がほぼ水平に広がる。内外面とも劣化が著しい。（1）（3）（4）は29号墓西の流土中から出土した。（2）は29号墓南の調査区外で採集した。27・28号墓から転落した可能性もある。（5）は29号墓上層の山道内堆積土中から出土した。

以下は須恵器である。蓋（6）は鈕のみである。坏（7）は体部が緩やかに立ち上がる。長頸壺（8）は頸部を欠く。肩部が緩やかながら稜をなし、平底で高台は付かない。大甕（9～11）は同一個体になるとみられる。口縁端部はやや肥厚し面を形成する。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部に近づくにつれ大きく外湾する。頸部外面に重なる波状紋が施される。体部内外にタタキ痕が残る。他にも破片があるが（第49図）、完形には足りない。体部（12）は残存状態が悪く、器種不明である。内外面にタタキ痕が残る。

これらは弥生時代中期中葉から9世紀代までの幅広い時期の遺物であり、検出した墳墓群とは直接関係しない。これらに伴う遺構は確認されていない。

第4節 小結

平成16年度のC区の調査では、27～29号墓とそれらに伴う祭式土器などを検出した。

27号墓 27号墓は、墳丘規模8×7.3m、北西側残存高約1.6mである。墳丘周囲に幅0.4～1.3mの平坦面がめぐり、墳丘裾は地山削り出し、墳丘の大半は盛土により形成する。

埋葬施設は、墳丘南西に偏在し、盛土下に構築される。墓壇規模約2.5×1.5m・深さ0.1～0.3m前後である。木棺は、H形の組合式箱形木棺で、約1.9×0.5mである。副葬品は確認されないが、棺が見えなくなる程度埋設した後、もしくは棺埋設後・墳丘盛土前の段階に置いたものと判断される角礫を検出した。被葬者頭位は南東と解釈される。

祭式土器は、墳丘周辺に細片となって散乱する。墳頂は少なからず削平されているとみられるが、墓壇内に土器が落下していないため、墓壇上に祭式土器をまとめていないことがわかる。

造営時期は、堀縄文（堀2002・2006）の風巻2（月影2）式期の範疇と判断され、2世紀中葉と捉える。

28号墓 28号墓は、墳丘規模8.5×8m、北西側残存高約1.6mである。墳丘周囲に幅0.4～1mの平坦面がめぐり、墳丘南東は溝により斜面から切断する。墳丘裾は地山削り出し、墳丘は主に盛土で形成する。2基の埋葬施設は、ともに盛土下に構築され、直上の墳頂面に埋葬施設陥没坑が形成される。

第1埋葬施設の陥没坑は、重なる長楕円形で、規模3.4×1.3m前後・深さ0.3m前後である。内部に土器片が集積する。墓壇規模は約2.9×約1.4m・深さ0.8～1.2mである。木棺はH形の組合式箱形木棺で、約1.9×0.45～0.55m・棺高0.4m以上である。副葬品は確認されないが、木棺裏込上から土器片、墓壇を埋め戻した後に置かれたとみられる角礫と土器片を検出した。被葬者頭位は北西と推測される。

第2埋葬施設の陥没坑は、1.3m以上×0.7m程度・深さ0.25m以上となる。墓壇規模は約1.8×約1m・深さ0.35～0.55mである。木棺はH形の組合式箱形木棺で、約1.3×0.45mである。副葬品は管玉2点である。このほか、墳頂の墓壇北脇にあたる部分に鉢の破片などがまとめられていた。被葬者頭位は北西

と捉えられる。

祭式土器は、墳頂の各墓域周辺と、墳丘周辺のとくに墳丘北側に集中して認められ、墳丘盛土下にも大型壺・甕の破片をまとめて埋め込んでいる。なお、盛土下の墳丘東隅付近には大型壺となる頸部突帯の破片と底部が残されるのみだが、上半は古代の削平時に失われたことが考えられる。

造営時期は、堀編年（堀2002・2006）の風巻2または3式期の範疇と判断され、2世紀中葉～後葉と捉えられる。墳丘の重複状況も28号墓は27号墓より後出であることを示す。

29号墓 29号墓は、墳丘規模約9.5×約7m、墳丘残存高西側約2m・東側約0.2mである。墳丘周囲には部分的に幅0.5m前後の平坦面が残る。墳丘東側は溝により斜面から切断する。墳丘裾と墳丘東側は主に地山削り出し、墳丘西側は盛土により成形するが、盛土の大部分が崩落していた。

埋葬施設は、墳丘はほぼ中央の盛土下に構築されるが、墳丘崩落に伴い大きく破壊される。墓域規模は約3.3×0.9m以上・深さ0.3m前後である。木棺形式は、北側小口部分に浅い窪みがあるとはいえ、組合式箱形木棺と刎抜系の木棺のどちらとも決し難い。棺規模は、墓域脇の地山に含まれる0.3m大の垂角礫の存在から、約3×0.4～0.6m程度となるものと考えられる。副葬品などは確認されなかった。

祭式土器は、墳丘西側の墳丘崩落後の二次堆積土中に須恵器などが流入するが、29号墓に伴うとみられるものは確認されていない。そのため造営時期の特定は困難であるが、27・28号墓と並びつても一定の間隙において造営されていること、27・28号墓とは墳丘造営や埋葬施設構築の方法に相違点が認められること、また、越前における古墳時代初頭～前期前葉頃には祭式土器量が減少することから、29号墓は、28号墓造営後連続して造営されたものではなく、やや時を置いて造営されたものであり、むしろ造営時期が古墳時代前期に下ることが考えられる。ただし、この墓域での造墓活動は29号墓（墳）の造営を最後とし、造墓可能な場所が存在するにもかかわらず墓域を放棄している。これは新たな造墓観に対応する意識の変化によるものと考えられ、ここに至り次段階への移行となる。

葬送儀礼（土器祭式）の痕跡 27号墓の埋葬施設と28号墓第1埋葬では、墓域を埋め戻す段階で角礫が置かれていた。27号墓の場合は、墓域を埋設する早い段階で角礫を配置するのに対し、28号墓第1埋葬では墓域を埋設し、墳丘盛土を施す前の段階に配置する。28号墓ではこの段階に破砕した大型壺・甕破片を墳丘東側に個体ごとにまとめて配置する。盛土を施し墳丘が完成した後、墳頂周囲にも若干の土器を配するようであるが、28号墓では第1埋葬直上に複数個体分の土器片を、第2埋葬北側に1個体分の鉢破片を配置している。このほか、28号墓北側に土器が集中して確認されるが、土器片の接合関係から墳丘周囲への配置が為された後に、残った破片をまとめて廃棄したことが考えられる。また、盛土下にまとめられた大型壺・甕の付近から第2埋葬北側の鉢に接合する破片が、墳丘北側の土器片集中地点から盛土下の大型壺・甕に接合する破片が出土しており、第1埋葬墓域内出土の土器片と墳丘西側出土の土器片が接合するという複雑な状況が確認されており、ここに当時の葬送儀礼に関わる土器祭式の一端が表れているものと考えられる。

参考文献

- 堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年―北陸南西部を中心に―」『朝日山』朝日町教育委員会
堀 大介 2006 「越前・加賀地域」『古式土器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター
御嶽貞義 1997 「墳墓群について」『袖高林古墳群』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
御嶽貞義 2011 「コシの弥生墓制」『日本海側の弥生墓制』鯖江市教育委員会

第5章 平成16・21年度（D区）の調査

第1節 調査の概要

D区は、C区の立地する尾根の北側に接する水田部分に位置し、D区の北側は別の小さな尾根に迫る（第2図）。調査対象範囲は北北東－南南西方向に直線的に延び、延長約150mにおよぶ。調査は、用地買収の都合により、平成16年度と平成21年度に分けて実施することとなり、調査対象範囲のうち北側から約90m分の調査を平成16年度に、残りの部分の調査を平成21年度に実施した。

平成16年度の調査は、排土置き場の関係から調査対象地を東西に二分して順次実施した。また、畦畔撤去の許されない箇所があったために南北にも三つに分断されることとなり、結果として6つの調査区に寸断された（第51図）。なお、6つに寸断された調査区のうち南側の2調査区については、すでに地山まで削られており、遺構が残存しない状態となっていたため、限定的な範囲で地山の状態を確認する程度に留め、調査対象範囲全体の表土を剥ぐことはしなかった。調査にあたり、各調査区のほぼ中央を通る任意の直線上に、それぞれ20m間隔の基準杭を設置した。東側の調査区から調査を実施し、完掘後ラジコンヘリによる航空写真測量を実施した。埋め戻し後、同様に西側の調査・測量を実施した。

平成21年度の調査は、南側から約55m分を実施した（第54図）。この調査時には平成16年度調査区の部分はすでに工事が進行し、路盤整備まで終了した状態であった。調査にあたり、調査区の北側と南東側に任意の基準点を設置し、完掘後、それをもとに平板・レベルによる測量をした。なお、平成16年度調査区と21年度調査区の間には依然として未調査の部分が残されていたが、その部分については平成21年7月16日に工事立会として実施し、ようやくD区のすべての調査を終えた。

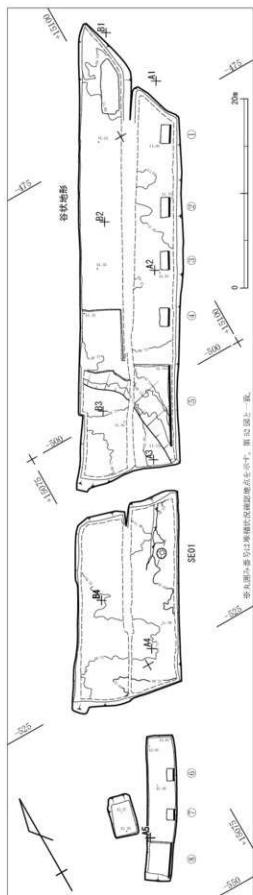
第2節 遺構

1 平成16年度調査区の遺構

平成16年度調査区の南半分は、すでに地山まで削り落とされた状態であり、その上に盛土をして平らに整地した状況が認められた。そのため遺構はほとんど残存しない。確認した遺構は1基の井戸（SE01）のみである。このほか調査区の北半分では、谷状に落ち込む地形を確認した。谷状地形は、落ち込み始める部分から深さ50cm程度までしか全掘せず、それより北側については4か所に設定した2×1mの範囲にて坪掘りをし（トレンチ①～④）、堆積状況と旧地形の深度を確認するに留めた（第51・52図）。

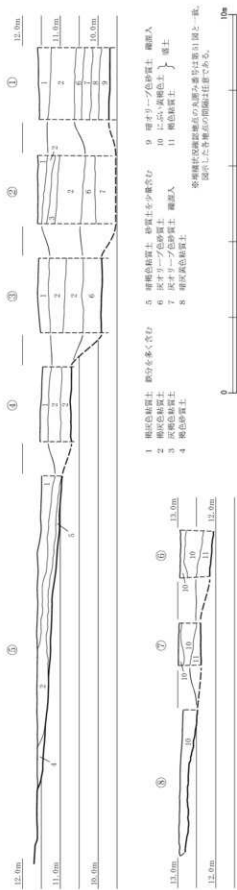
井戸（SE01）（第53図） 東側調査区の中央からやや南に位置する素掘りの井戸である。検出面での平面形は歪な円形で、規模は径0.95～1m、検出面からの深さ2.25～2.3mである。周辺の状況から、すでに遺構生活面は削平されており、付帯設備などの存在は不明である。埋土の堆積状況は、下層に砂質土や砂を含む土壌が堆積し、上半は炭化物などを含む粘質土が堆積する。遺物は、埋土中から丸形の露卵下駄やD型バンドコ（笏谷石製火火）の蓋片が出土した。出土遺物から、概ね17世紀代に利用されて、その後放棄されたものとみられる。

谷状地形（第51・52図） 調査区延長約90mのうち北側の35～40mを占める。調査区中央付近から北へ緩やかに下降し、②地点付近が最新部となる。①地点で一度上昇するものの僅かに北へ傾斜し下降する状況が観察されるが、調査区の北に東から延びる尾根があるため、ほどなく上昇して尾根斜面につながるものとみられる。②地点では確実な地山面（谷底）を検出し得ていないが、地山削平面から最深度

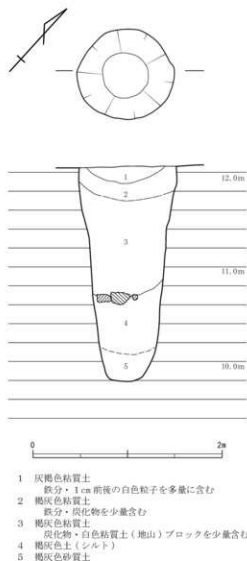


第51図 D区(平成16年度)全体図(縮尺1/400)

①～⑤:谷状地形



第52図 D区(平成16年度)堆積状況(縮尺1/100)



第53図 SE01 (縮尺1/40)

り、下層ほど砂質土が粘質土層中に混入する状況である。谷底面は最下層の遺物包含層の直下を面的に検出した。遺物は、谷底から約0.8m埋没した中層部分と谷底付近とに大きく分かれて出土した。中層出土の遺物は主に古代の須恵器片であり、その中には墨書土器や転用硯が含まれる。谷底出土の遺物は弥生土器・土師器や石器、木製品などがある。北斜面から転落して集積した状況の土器が比較的多く、全容の窺えるものが散見される。南斜面裾付近に集積する土器も少なくともはなかったが、脆弱で取り上げ困難なものが多かった。

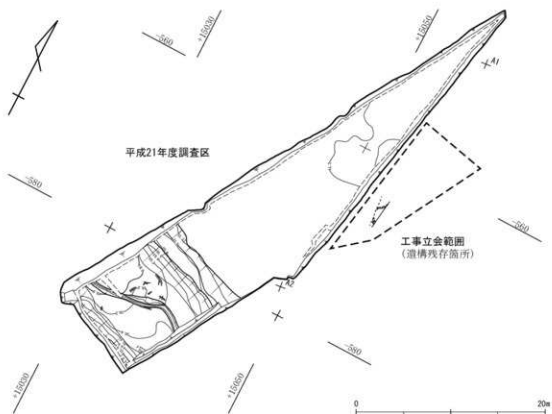
土坑 (第58図) 検出した3基の土坑は、規模の大きい順にSK01～03とした。SK01・02は重複しており、SK01埋没後にSK02が掘削されている。SK01は歪な方形を呈すものと見られ、検出面での規模は一辺1.5m、深さ0.5m前後である。埋土中に土器細片が含まれていた。SK02は、歪な楕円形を呈すようであり、中央部が二段掘りとなる。検出面での規模は長径1.25mであり、深さ約0.2mの平坦となる部分から、さらに径0.5m、深さ0.2～0.25mの下段が掘られている。SK03は断面のみでの確認であり、平面的には検出し得なかった。南北0.4m、検出面からの深さ0.3mである。SK02・03には遺物がなく、SK01出土の土器細片は二次的な混入である可能性が高いため、これらの時期を特定し得ない。

までの深さは2mを超えるようである。埋土の堆積状況は、下層に礫の混入する砂質土が堆積しており、上層に粘質土が分厚く堆積する。下層の砂質土は、粘質土との互層となる部分も確認され、水の流れた痕跡を示唆するものと捉えられる。上層の粘質土は、ほぼ均質な土壌が広く展開しており、一度に広範囲にわたり埋め立てられたことが窺え、過去の圃場整備時の造成土であると思われる。遺物は、堆積土の中～下層を中心に越前焼の播鉢や甕などのほか、古代の須恵器片が多量に出土した。須恵器には墨書の認められるものや風字硯の破片が確認された。

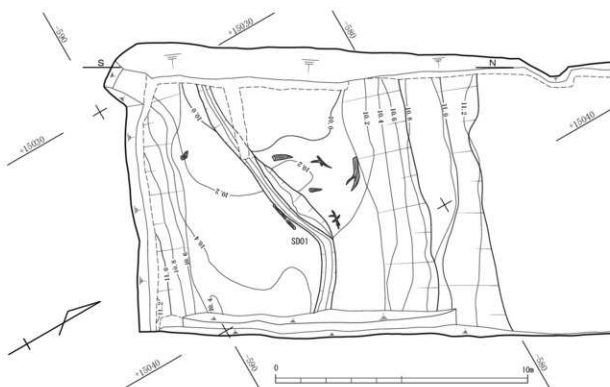
2 平成21年度調査区の遺構

平成21年度の調査では、調査区の南端部分に谷状地形を確認した(第54・55図)。谷状地形の底面には蛇行する一条の溝を検出したが、人為的なものでなく自然の谷川のようなものである。その他、工事立会時には3基の土坑を検出した(第54・58図)。

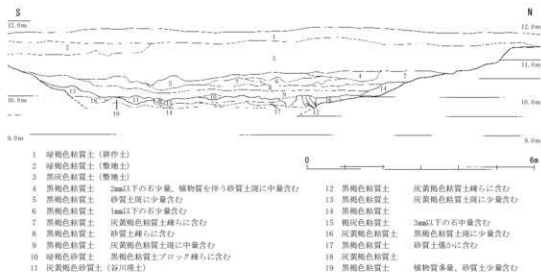
谷状地形 (第55～57図) 調査区南端から約15m分を占める。地山削平面からの深さは約1.5mである。谷状地形の北斜面は比較的緩やかである。それに対して、南斜面は谷底面から比較的急傾斜で立ち上がり、南に迫る尾根の斜面へとつながる状況が窺える。堆積状況は、下半が自然堆積で、上半が過去の圃場整備により埋め込まれたことを示す。下半の自然堆積層は、粘質土層間に時々砂質土層が挟まるように堆積してお



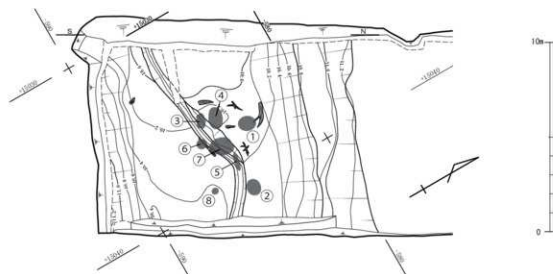
第54図 D区(平成21年度調査区)および工事立会遺構残存範囲(縮尺1/400)



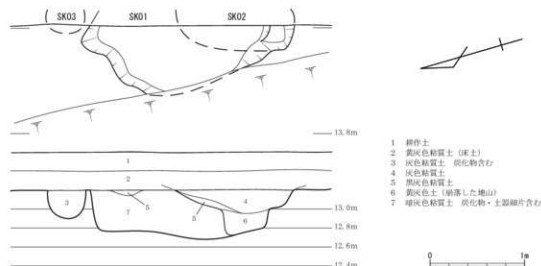
第55図 谷状地形および谷川(SD01)(縮尺1/150)



第56図 D区（平成21年度）谷状地形堆積状況（縮尺1/100）



第57図 D区（平成21年度）谷状地形内出土土器集中地点（縮尺1/200）

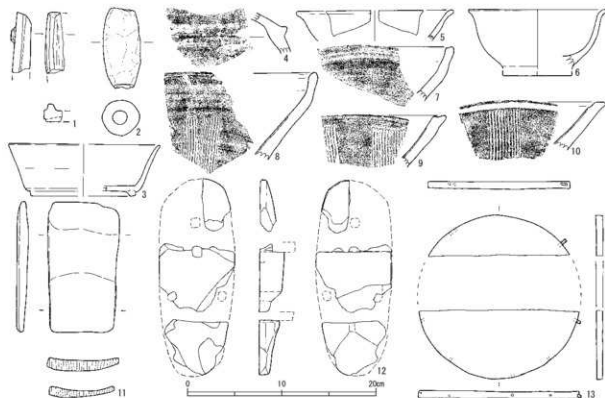


第58図 工事立会時検出土坑（縮尺1/40）

第3節 遺物

1 平成16年度調査区の遺物（第59図1～13）

古代の須恵器など4点、中世の陶磁器6点、そのほか木製品を3点図化した。古代の須恵器は高台杯（3）と胴部上半の肩部に凸帯が貼り付く壺の破片（4）である。他に土鍾（2）と、細片ではあるが風字硯の端部縁（1）がある。また、図化しなかったが、墨書土器「和□〔志か?〕」と、線刻のある胴部に耳か脚がつく須恵器片もある（図版第6（3））。中世の陶磁器は、越前焼の捏鉢口縁1点（7）と摺鉢3点（8～10）、白磁碗（5）と青磁碗（6）の口縁部片各1点がある。木製品は、用途不明の長方形板材（11）と、木釘が残る曲げ物の底板（13）、井戸から出土した下駄（12）の3点である。下駄は3つに寸断されるが、丸形の露卯下駄に復元できる。井戸からは凝灰岩（笏谷石）製D型バンドコ（行火）の蓋（図版第6（3））も出土している。古代の須恵器はB区と同じ9世紀前半の時期に納まり、中世の陶磁器は14世紀から16世紀と時期幅がある。



第59図 D区（平成16年度）の遺物（縮尺1/4）

第8表 D区（平成16年度）遺物観察表

探図番号	地区	遺物番号	器種・器類	口径・長さ・高 (cm)	調整	色調	備注	出土・備考
第59図1	A7	谷状地形 (H16)	風字硯片	高: 6.4	外) ナズリ、ナズリ 断面貼り付 内) ナズ	灰白色	良好	① ①
第59図2	A7	谷状地形 (H16)	磁器質土鍾	長さ: 8.5 最大径: 3.8 孔径: 1.5	内) 全面にユビ押さえ	灰色	良好	①
第59図3			表土	杯B	外) 口縁-体部: 回転ナズ 底部: 回転ヘラ 留り後ナズ 内) 口縁-体部: 回転ナズ	灰色	良好	① ①
第59図4	A7	谷状地形 (H16)	壺残片	残存高: 4.4	調整不明	灰白色	良好	① ①
第59図5			トレンナ①	白磁碗 口径: 17 底径: 残存高: 3.2	内外面施釉	釉: 灰白色	良好	灰白色地に黒色粒を若干含む
第59図6			表土	青磁碗 口径: 14.6 底径: (7.4)	内外面施釉	釉: オリーブ	良好	灰色地に白色粒を若干含む
第59図7	B6-7		磁器残片	残存高: 6.9	内外面ナズ	灰色	良好	青灰色地に小穴、砂粒を含む
第59図8			トレンナ①	越前焼鉢 口径: 9.2	内外面ナズ 内) 7条1帯の横目	によい-褐色	良好	灰白色地に白色粒・小穴を含む
第59図9	A7	谷状地形 (H16)	越前焼鉢	残存高: 5.1	内外面ナズ 内) 11条の横目	明褐色	良好	灰白色地に白色粒を含む
第59図10	A7	谷状地形 (H16)	越前焼鉢	残存高: 5.5	口縁部つまみあげ 内) 12条の横目	明褐色	良好	灰白色地に白色粒・小穴を含む
第59図11			SD01	長さ: 14.0				
第59図12			本砂 (下駄)	長さ: (21.0) 幅: (8.0)	底面下駄タイプ 底面下駄 曲線孔1つ残存			木・南欠損
第59図13			トレンナ①	本砂 (面物)	直径: (17.4)	木ねじ穴8ヶ所、木ねじ2本残存		木

2 平成21年度調査区の遺物

1) 土器・土製品(第60図・第61図1～36)

弥生時代中期～古墳時代前期の土器147点・平安時代の須恵器37点・鎌倉時代の土器1点の総計185点を確認した。また須恵器には、転用硯及び墨書土器を26点含む。これらのうち、弥生～古墳時代の土器31点、平安時代の須恵器23点、鎌倉時代の土器1点を図示した(第60・61図、第9表)。

弥生時代中期と考えられる土器は、櫛描直線文・波状文を施文された壺1点(第60図1)で、それ以外は、弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器である。器種は、壺10点(第60図2～5・7～12)、甕7点(第60図13～19)、鉢3点(第61図1～3)、高坏6点(第61図4～9)、器台3点(第61図10～12)、小型丸底土器1点(第60図6)である。無頸壺(第60図2)は、結束孔のある把手のみが残存して口縁部で対となり、弥生時代後期後半である。大型の複合口縁壺(第60図10)は、口縁の立ち上がりが高く、内面には樹脂状の黒色物の塗布が見られ、端部に面をもつ。胎土はチョコレート色を呈し、角閃石を含むことから、香川県の香東川下流域からの搬入品と想定され、古墳時代前期と考えられる。ヘラ記号のある土器は4点(第60図4・11・14・17)あり、17は、甕の底部に「+」状に直線を入れている。「く」の字状口縁を呈する甕(第60図19)は、口縁部の立ち上がりが高くヨコナデを施す。山陰地方に多く分布する平底を呈し、底部内面をヘラケズリ調整で仕上げ、古墳時代前期と想定される。高坏で、坏部外面に沈線と10条の爪形圧痕文を横方向に巡らすもの(第61図5)、口縁部に2条1対の棒状浮文のある広口壺(第60図9)は、東海系の影響を示し、古墳時代初頭である。

平安時代の須恵器は、主に8世紀前半～9世紀の所産で、蓋4点(第61図13・32・35)、無台坏10点(第61図14・20～22・24～26・29・30・34)、有台坏6点(第61図16・18・23・27・31・33)、皿2点(第61図15・19)、鉢1点(第61図17)を図示した。そのうち墨書土器は16点(第61図18～31・34・35)、転用硯は3点(第61図18・32・33)である。有台坏(第61図18)は、「田□[村カ]」と墨書された後、硯に転用された影響で畳付は、磨面している。他に、墨書土器で判読できる文字は「鶴依」「縄継」「西」「田」である。鉢形を呈すもの(第61図17)は、体部下半に回転ヘラケズリ後回転ナデを施し、把手を貼り付けた盤になる可能性もある。

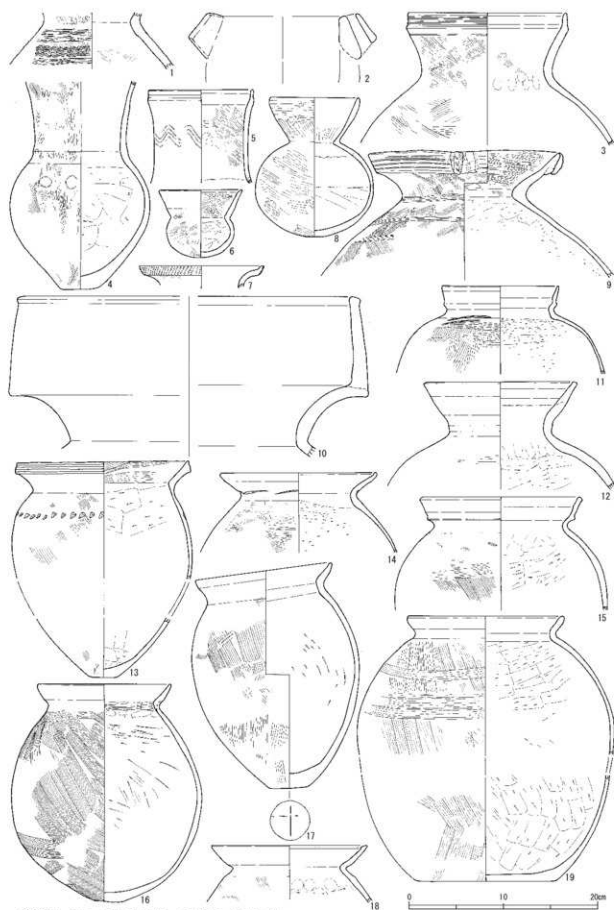
鎌倉時代の土師質の皿(第61図36)は、口縁端部を強くナデ回し、指頭圧痕を施し13世紀後半である。

2) 木製品(第61図37～39)

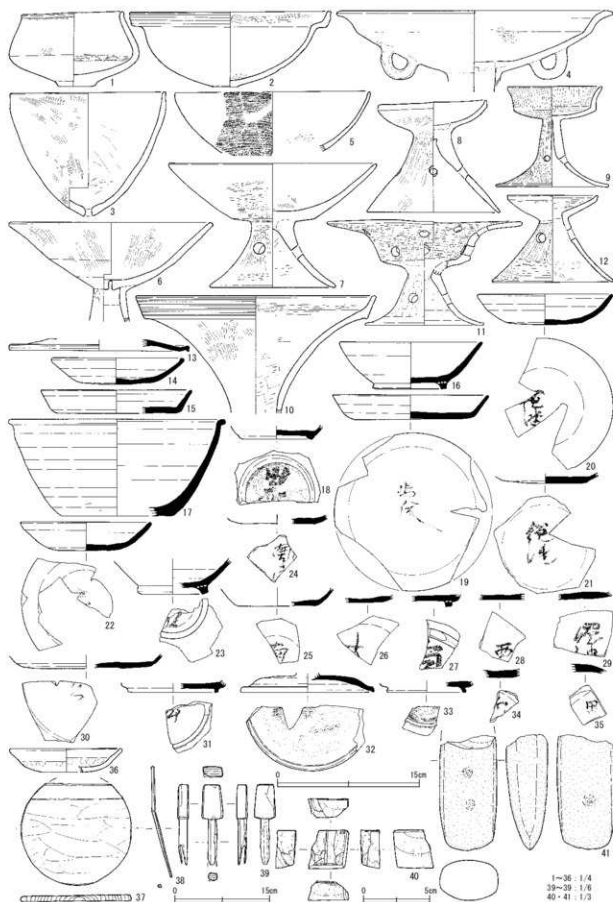
木製品は、曲物の部材や加工された部材などが出土した。残存状況が良好のものを選定し、曲物、箸、加工部材各1点を図示した。曲物(第61図37)は、底板で約2cm幅の加工痕がある。箸(第61図38)は、中央付近で折れ、断面がやや四角形で面取り加工をする。加工部材(第61図39)は、軸部の下端が欠損し、断面は四角形を呈す。身部の断面は長方形で、縦断面では台形状を呈した形状である。

3) 石器・石製品(第61図40・41)

玉製品の核1点、磨製石斧1点を図示した。玉製品(第61図40)は形制段階のもので、表面中央に長軸方向、表面下端に短軸方向、上面上端に短軸方向、右側面上端に短軸方向の計4本の施溝痕がある。磨製石斧(第61図41)は安山岩製で、側辺がほぼ平行する平らな基部をもち、断面が厚手で楕円形を呈す大型給刃石斧である。上端は欠損しており、表裏面中央に敲打痕があり凹んでいる。



第60図 D区(平成21年度)の遺物①(縮尺1/4)



第61図 D区（平成21年度）の遺物②（縮尺1/4・1/6・1/3）

第3節 遺物

第9表 D区(平成21年度)土器観察表

拝見番号	出土地点 遺構など	地盤 層位	種類	器種	寸法 (cm)		調査	色調		備考	
					口縁 直径	残存高		外面	内面		
第9001	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	—	(6.7)	外(口縁)ハケのちミギキ 底部ハケのち書香直線文 (8)+底状文(9)+直線文(8)の 内(口縁)底部ハケ	褐色	にぶい 褐色	図③	
第9002	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	把手付 壺	—	—	内外ともに同様に	灰白色	にぶい 黄褐色	図③	
第9003	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(16.6)	(8.8)	外(口縁)横間線文(5)+口コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	淡黄褐色	淡黄褐色	図③	
第9004	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	4.0	(22.1)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9005	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(11.1)	(9.8)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文(4)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9006	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	小型壺	8.8	7.2	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9007	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(12.0)	(2.4)	外(口縁)横間線文(2) 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9008	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(9.3)	14.7	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9009	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(20.0)	(13.5)	外(口縁)横間線文(4)+横間線文(5) 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文(5)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9010	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(36.4)	(17.0)	内外ともに同様に	褐色	褐色	図③	
第9011	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(12.2)	(9.3)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	淡黄褐色	淡黄褐色	図③	
第9012	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	16.1	(11.4)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	淡黄褐色	淡黄褐色	図③	
第9013	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	18.3	(28.3)	外(口縁)横間線文(2) 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	灰白色	灰白色	図③	
第9014	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(16.2)	(8.5)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	淡黄褐色	淡黄褐色	図③	
第9015	谷沢地区 (H21)	砂層	土師器	壺	(17.2)	(12.0)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9016	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	14.2	23.0	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	暗褐色	暗褐色	図③	
第9017	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	14.6	23.9	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9018	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	壺	(16.4)	(6.1)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9019	谷沢地区 (H21)	砂層	土師器	壺	(16.8)	(14.7)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9020	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	鉢	10.9	4.2	7.9	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③
第9021	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	鉢	21.3	2.6	7.9	外(口縁)横間線文(2) 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③
第9022	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	有孔鉢	16.0	13.0	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	灰褐色	灰褐色	図③	
第9023	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	(29.2)	(8.6)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	褐色	褐色	図③	
第9024	谷沢地区 (H21)	砂層	土師器	高杯	(20.6)	(6.3)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9025	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	21.6	(10.5)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9026	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	(22.8)	13.1	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	褐色	褐色	図③	
第9027	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	11.4	11.9	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	褐色	褐色	図③	
第9028	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	(10.0)	10.7	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9029	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	(12.0)	10.7	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9030	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	(25.5)	(12.3)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9031	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	20.2	(11.2)	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	淡黄褐色	淡黄褐色	図③	
第9032	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	9.9	9.2	外(口縁)コナデ 内(口縁)コナデ 底部ハケ+曲線直線 文・底状文	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	図③	
第9033	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	高杯	(19.2)	(1.2)	内外ともに同様に	灰褐色	灰褐色	図③	
第9034	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	土師器	無台鉢	(14.0)	7.2	2.8	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	灰褐色	灰褐色	図③
第9035	谷沢地区 (H21)	表土	無色器	無台鉢	(16.0)	(12.6)	(5.0)	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	灰色	灰色	図③
第9036	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	無色器	有台鉢	15.2	7.8	5.0	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	灰色	灰色	図③
第9037	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	無色器	鉢?	(23.0)	(12.0)	10.2	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	灰色	灰色	図③
第9038	谷沢地区 (H21)	砂層	無色器	有台鉢	(7.4)	(1.5)	1.5	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	灰色	灰色	図③
第9039	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	無色器	無台鉢	16.7	2.6	7.9	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	灰色	灰色	図③
第9040	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	無色器	無台鉢	(14.4)	(8.2)	3.2	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	緑褐色	緑褐色	図③
第9041	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	無色器	無台鉢	8.8	(1.0)	1.0	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	緑褐色	緑褐色	図③
第9042	谷沢地区 (H21)	粘質土層一 砂層	無色器	無台鉢	(14.0)	(8.2)	3.0	外(口縁)横間線文(2) 底部・口縁ハケのちミギキナデ 内(口縁)横間線文	オリーブ 色	オリーブ 色	図③

第610823	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 有台 環?	(7.5)	(3.8)	外(体)~底部:回転ナデ 内(体)~底部:回転ナデ	緑灰色	緑灰色	具	①	墨書「口」
第610824	谷状地形 (H21)	粘質土層~ 砂層	須恵器 無台環	(8.0)	(1.0)	外(大丹部):回転ヘラタヌリ後ナデ 内(大丹部):回転ナデ	灰色	灰色	具	②	墨書「口」(南*)「口」
第610825	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 無台環	(8.0)	(2.0)	外(体部):回転ナデ 底部:回転回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ	灰色	灰色	具	③	墨書「南(n)」
第610826	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 無台環	—	(0.8)	外(体部):回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ	灰色	灰色	具	④	墨書「口」(大*)
第610827	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 有台環	—	(1.4)	外(体部):回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ	緑灰色	緑灰色	具	⑤	墨書「南(n)」
第610828	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 環?	—	(0.6)	外(体部):回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ	灰色	灰色	具	⑥	墨書「西」
第610829	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 無台環	—	(0.7)	外(体部):回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ後ナデつけ	オリーブ 灰色	灰白色	具	⑦	墨書「口」(南*) 底面に無目瓦片存在 墨書「口」(n*) 底面内面に磨痕あり
第610830	谷状地形 (H21)	粘質土層~ 砂層	須恵器 無台環	(8.8)	(1.5)	外(体部):回転ナデ 底部:回転ヘラ切後ナデ 内(体部):回転ナデ	灰白色	灰白色	具	⑧	転用瓦
第610831	谷状地形 (H21)	粘質土層~ 砂層	須恵器 有台環	(8.8)	(1.4)	外(体部):回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ後ナデつけ	緑灰色	緑灰色	具	⑨	墨書「口」(n*)
第610832	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 蓋	(14.0)	(2.1)	外(大丹部):回転ヘラタヌリ後ナデ 内(大丹部):回転ナデ	緑灰色	緑灰色	具	⑩	転用瓦
第610833	谷状地形 (H21)	粘質土層~ 砂層	須恵器 有台環	(8.2)	(1.2)	外(体部):回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ	灰白色	灰白色	具	⑪	転用瓦
第610834	谷状地形 (H21)	粘質土層~ 砂層	須恵器 無台環	—	(0.9)	外(体部):回転ヘラ切り後ナデ 内(体部):回転ナデ	灰白色	灰白色	具	⑫	墨書「口」(南*)
第610835	谷状地形 (H21)	粘質土下層	須恵器 蓋	—	(0.9)	外(大丹部):回転ヘラタヌリ後回転ナデ 内(大丹部):回転ナデ	緑灰色	緑灰色	具	⑬	墨書「田」
第610836	谷状地形 (H21)	粘質土下層	土師器 皿	(12.0)	(2.5)	外(口縁):回転ナデ 体部:磨面粗 内(口縁):磨り削しナデ 体部:磨面粗	灰白色	灰白色	具	⑭	①

第10表 D区(平成21年度)木製品観察表

探図番号	出土地点	種類	法量 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
第610837	谷状地形 (H21)	粘質土下層	底板	17.7	16.1	1.0
第610838	谷状地形 (H21)	粘質土層	蓋	18.8	0.6	0.6
第610839	谷状地形 (H21)	砂層	砂層	12.7	3.3	1.7

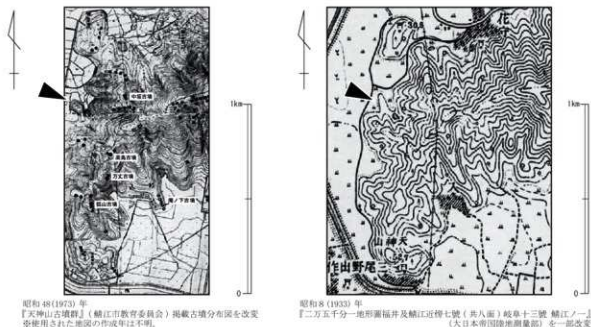
第11表 D区(平成21年度)石器・石製品観察表

図版番号	出土地点	種類	石材	法量 (cm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
第610840	谷状地形 (H21)	形割	緑色凝灰岩	3.0	3.1	1.5	19.5	4本の地溝あり
第610841	谷状地形 (H21)	磨製石斧	安山岩	12.2	6.1	4.3	479.0	表面に磨痕あり

第4節 小結

D区(平成21年度)の調査の結果、南北に長い調査区の中央部分が大きく削平されており、深い遺構の下部が辛うじて残存する状態であること、調査区の南北両側部分とはともに谷状に落ち込む地形であることが確認された。このことは地元の人の多くに忘れられた事実であったが、高齢の方からは「過去の園地整備前には山があった」という情報があった。そこで、過去の地図や航空写真にて確認したところ、すでに消滅した尾根が記載されており(第62図)、その地形は調査によって確認した状況と合致する。第3・4図と第62図の地図を、D区の南東側に共通して認められる溜池の表記に着目して比較すると、天神山から派生した小高く緩やかな傾斜の尾根が、D区にあたる位置に南東から北西へと延びていたことが確認できる。その尾根の先端部は、緩やかな傾斜で畑地として利用されていたようである。「ここに数軒の家があった」という話もあったが、その確認はできなかった。しかし、北側の谷状地形堆積土中から越前焼の甕や播磨、青磁碗の破片などが出土しており、SE01の埋土中から差歯式の露卯下駄や全面が煤けたD型バンドコの蓋などが出土していることから、中・近世において人の営みがあったことは確実である。

また、南北両側の谷状地形から古代の須恵器が多量に出土しており、その中には転用瓦や風字瓦のほか、「和」(志カ)「縄」(西口)「南」(田口)「村」(口公)「嶋」(嶋依)などと墨書されるものが確認されており、この失われた尾根の周辺に古代寺院が存在したことが推測される。B・C区でも遺構には伴わないものの同様な時期の須恵器が点在することが確認されていることから、周辺にも寺院に関わる活動が及んでいたものとみられる。



第62図 過去の地図に見える圃場整備により消滅した尾根(縮尺1/15,000)

この他、南側の谷状地形の堆積土中からは、弥生時代中期から古墳時代前期までの弥生土器・土師器が転落した状態で確認された。南側斜面(C区側)から転落した土器は、脆弱で取り上げ困難な状態のものが多い。それに対して、北側斜面(削平された尾根側)から転落して集積した土器は、劣化・風化の度合いが小さく、比較的良好な状態のものが多い。また、北側斜面から転落した土器の集積は、おおまかに8地点にわかれる(第57図)が、そのうち北側斜面に近い①・②・⑤は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半、それ以外の地点には弥生時代終末期～古墳時代前期中・後葉の土器が集積する。北側斜面から転落した土器の劣化・風化の度合いが小さいことは、土器の転落後早い段階で埋没したことを示しており、厳密ではないものの含まれる土器の帰属時期が分かれることから、少なくとも2度にわたり土器の転落と斜面の崩落・堆積が起きたことがわかる。出土した土器は日常生活で使用されたような煤けた甕などが比較的多く確認され、玉類製作過程の施溝分割痕が残る緑色凝灰岩片も確認されることから、付近に弥生・古墳時代の居住域の存在した可能性が考えられる。また、想定される居住域は、南側尾根(C区)の墳墓群との関係が予想されるとともに、削平された尾根上にも墳丘墓や古墳が造営されていたことが考えられる。

D区は、主な遺構が存在したであろう尾根が未調査のまま削平されて消滅した地点である。尾根上から転落あるいは廃棄された遺物が谷状地形の堆積土中から出土したに過ぎないが、それらから尾根上に営まれていた遺跡の詳細を推測することは困難であるが不可能ではない。D区の調査で比較的まとまった量の9世紀代を中心とする奈良・平安時代の須恵器が出土し、その中に転用碗・風字碗と墨書を有するものが確認されたことで、かつてこの周辺に古代寺院の存在したことが推測できるようになった。その意義は大きい。なお、気比神社境内の13世紀第3四半期(1270年代)製作とみられる宝塔塔身や三ツ禿山山頂の古墳を改変した中世墓の存在、B区南西斜面掘付近で五輪塔空風輪片が採集されるなど、比較的広範囲に寺院に関わる痕跡が展開しており、鎌倉時代以降にも寺院が存在したようである。ただし、古代から存続した同一のものか否かは不明である。

第6章 総括

天神山古墳群の調査は、天神山丘陵北西部の4地点（A～D区）にて実施した。A・B区は丘陵尾根上に立地し、深い鞍部を挟んで向き合うように位置する。C区はA・B区から約400m南西に離れた尾根の先端部分に位置する。D区はC区の立地する尾根に北接する水田部分に位置する（第2図）。

以下、各調査区の成果をまとめる。

A・B区 古墳時代前期の古墳（41～44号墳）を確認した。41・44号墳は方墳、42・43号墳は円墳である。42号墳には東側に地山削り残しの陸橋がある。各古墳の墳丘規模は、41号墳：19.6×18.6m・残存高約1.5～3.5m、42号墳：径13.4～14.6m・残存高約0.75～4.5m、43号墳：径8.5～9m・残存高約0.25～3m、44号墳：一辺約13m・残存高約1～1.5mである。いずれの墳丘も少なからず古代以降の改変を受けており、そのため埋葬施設が残存したのは41号墳のみであった。

41号墳の埋葬施設は、墳丘盛土過程で形成した土手状盛土の内側を墓壇とする構築墓壇であったため、平面的に検出できなかったが、土層断面図から構築墓壇のおおまかな位置を復元し得た（第14図）。墓壇中央には棺を据えた浅い窪み（棺壇）が確認できる。構築墓壇の範囲は5.5以上×3.1m・深さ約0.5m、棺壇下端での規模約4×1.1mに復元される。副葬品とみられる鉈（第23図）は、墓壇底から0.18m程度浮いた位置で出土しており、本来は棺蓋上またはさらに上方に埋置されたものと判断される。鉈は棺に直交する向きで棺壇の北側小口付近に位置しており、この位置に被葬者頭位が示される。

祭式土器は42号墳周溝内よりまとまって出土した。そのうち1個体分の壺（第22図1）が、墳丘の北側と東側、陸橋北側に分かれて出土したことから（第10・17図）、別地点にて破砕したものを配置（廃棄）したことがわかる。おそらく、土器を伴う儀礼行為（土器祭式）の終了後、その壺だけでなく、すべての祭式土器をまとめて破砕し、墳丘周囲に再配置したのであろう。

また、B区に点在する古墳時代中期後葉の土器（第22図6～8）と有孔円板（第23図）は、古代以降の改変により二次的に移動しており、元の位置を留めない。古墳の副葬品か、尾根上での祭祀行為に使用したものと考えられるが、詳細不明である。このほか、各墳丘上や周辺から古代の須恵器が出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。

造営時期は、41号墳：古墳時代前期前半（前Ⅰ～Ⅲ期）＝3世紀中葉～後半、42・44号墳：古墳時代前期中葉（前Ⅲ～Ⅳ期）＝3世紀後葉～4世紀前葉、43号墳：古墳時代前期中葉～後半（前Ⅳ期以降）＝4世紀代とみられ、古墳時代前期のうちに相次いで造営されたものと考えられる。

C区 弥生時代終末期の墳丘墓（27～29号墓）を検出した。いずれも墳形は長方形で、規模は27号墓：8×7.3m・残存高約1.6m、28号墓：8.5×8m・残存高約1.6m、29号墓：約9.5×約7m・残存高約2mである。いずれも近現代の山道が掘り込まれており、少なからず古代の改変も受けるが、加えて29号墓は墳丘の大半が流失する。なお、埋葬施設はいずれも墳丘盛土以前に掘り込まれる。

27号墓の埋葬施設は、墳頂南西側に偏在し、追葬の余地を残す配置となる（第29図）。埋葬施設陥没坑は古代以降の改変のため把握し得なかった。木棺形式はH形の組合式箱形木棺である（第31図）。墓壇規模約2.5×1.5m・深さ0.1～0.3m前後、棺規模約1.9×0.5mである。副葬品は確認されないが、棺が見えなくなる程度埋設した後もしくは墓壇埋設時（墳丘盛土以前）に0.2m大の角礫が置かれる。被葬者頭位は不明であるが、角礫の位置が上半身側に偏在すると想定され、南東と解釈される。

28号墓の2基の埋葬施設は、墳丘中央付近に等しく寄せ、墓壇の南東小口を揃えて配置される（第32・36図）。ともに木棺形式はH形の組合式箱形木棺である。第1埋葬施設は、墓壇規模約 2.9×1.4 m・深さ $0.8 \sim 1.2$ m、棺規模約 $1.9 \times 0.45 \sim 0.55$ m・棺高 0.4 m以上である（第38・39図）。墓壇上には 3.4×1.3 m前後・深さ 0.3 m前後の埋葬施設陥没坑が形成される。副葬品は確認されないが、木棺裏込上に高坏もしくは器台の脚部片が置かれていた（第37・40図）。また、墓壇埋設時（墳丘盛土以前）に 0.2 m大の角礫が置かれ、この時にも2点の高坏もしくは器台の脚部片を置いている（第36・37図）。被葬者頭位は、木棺北西小口での内法幅が約 0.4 mであり南東側はより狭くなるため、北西側であろう。

第2埋葬施設は、墓壇規模約 1.8×1 m・深さ $0.35 \sim 0.55$ m、棺規模約 1.3×0.45 mである（第39図）。墓壇上には 1.3 以上 $\times 0.7$ m程度・深さ 0.25 m以上の埋葬施設陥没坑が形成される。副葬品は管玉2点（第48図）を木棺内北側で検出した（第41図）。管玉の位置から被葬者頭位は北西とみられる。

29号墓の埋葬施設は墳丘の流失に伴い西半部を失う（第44図）。墓壇規模は約 3.3×0.9 m以上・深さ 0.3 m前後である。木棺形式は、墓壇北側小口の浅い窪みを小口穴と認識すると組合式箱形木棺となるが、列枚系の木棺を使用した可能性も払拭できず、どちらとも決し難い。棺規模は、長さ約 3 mである。棺幅は、墓壇南西側の地山に含まれる 0.3 m大の亜角礫のために規模が限定され、下端で $0.4 \sim 0.6$ m程度となるものと考えられる。副葬品などは確認されない。被葬者頭位は不明である。

祭式土器は、27号墓では墳丘周辺に認められたが、29号墓に伴うものは確認されなかった。28号墓では、第1埋葬上面・第2埋葬上北脇（第36図）、墳丘盛土下（第32・35図）、墳丘周辺などに確認され、墳丘周辺のものはとくに墳丘北側に集中する。なお、各墳丘上や周辺から古代の須恵器が出土したが、遺構に伴うものではない。唯一、28号墓上の焼土坑（第45図）がそれらに関わる可能性を持つ。

造営時期は、27号墓：風巻2（月影2）式期＝2世紀中葉、28号墓：風巻2・3（月影2・3）式期＝2世紀中葉～後葉、29号墓：弥生時代末～古墳時代初頭＝3世紀前葉とみられる。弥生時代終末期半ば頃と弥生時代末もしくは古墳時代初頭に、やや間があくものの継続的に造営されたようである。

D区 過去の圃場整備で削平された尾根の痕跡と、その南北両側の谷状地形を確認したに過ぎない（第51・54図）。しかし、谷状地形に落ち込む古代の須恵器が多量にあり、その中に転用硯（第61図18・32・33）や風字硯（第59図1）、「和□〔志カ〕」「繩継」「西□」「南□」「田□」「□公」「嶋依」などの墨書のあるもの（第61図18～31・34・35）が確認されたことから、削平された尾根の周辺に古代寺院の存在したことが推測できるようになった。また、B・C区にも9世紀代を中心とする古代の須恵器が点在するため、寺院に関わる活動が広範囲に及ぶものとみられる。なお、気比神社境内の13世紀第3四半期（1270年代）製作とみられる宝塔塔身やB区南西麓で採集された五輪塔空風輪片（第5図）、三ツ禿山頂の中世墓の存在など、中世以降の寺院に関わる痕跡も広範囲に展開しており、鎌倉時代以降にも寺院が存在したようである。ただし、古代から同一の寺院が存続したのか否かは不明である。

この他、南側谷状地形から弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土した。煤けた甕など日常生活で使用したとみられるものが比較的多く、あわせて玉類製作過程の施溝分削痕の残る緑色凝灰岩片も確認されるため、付近に弥生・古墳時代の居住域の存在した可能性がある。また、その居住域とC区の墳墓群との関係が予想されるとともに、削平された尾根に古墳などが造営されていたことも推測される。

さらに、北側谷状地形からは越前焼の播鉢や甕などが出土し、辛うじて残存した井戸SE01（第53図）の埋土中から丸形の露卯下駄やD型バンドコ（笏谷石製行火）の蓋片が出土したことから、中近世においても人の生活の場として利用されていたことが明らかとなった。

その他 A・B区で縄文時代の遺物を確認した。A区のもの数は数点の土器細片で図化し得ない。A区の北側に包含層が展開したとしても遺物量は希薄であろう。B区(41号墳下層)では縄文時代中期前葉と晩期後葉を中心とした土器および石器が出土した。しかし、いずれも細片で図示し得たものは少ない。B区では土坑が確認されたが、いずれも縄文時代の包含層を掘り込むため、確認される縄文時代の所産ではなく、それ以降から古墳造営直前までの間に構築された遺構であることが明らかである。

以上、調査成果を網羅的に記述したが、今回の調査区の大半が少なからず後世の改変を被り、詳細まで確認し得たものが少ないのは残念である。そんななか、C区の、とくに28号墓の祭式土器は、二次的に移動していたとしても本来の位置を示すものが多く、土器の埋設・破片の集積・廃棄(配置)などの状況を把握し得るものであった。当時の葬送儀礼行為そのものを復元することはできないが、葬送儀礼のうち土器を伴う行為(土器祭式)の一端を垣間見ることができる良好な資料である。

28号墓における土器祭式 最後に、確認される祭式土器の状況などから、28号墓の造営と埋葬に関わる土器祭式の過程を復元する。28号墓の土器祭式の痕跡は、①第1埋葬墓墳内、②墳丘盛土下、墳頂(③第1埋葬上・④第2埋葬上北脇)、⑤墳丘北側にある(第28・35・36図)。このうち①と③、③と④、②と④、②と⑤の土器片に接合するものがあるため、これらの土器は墳丘盛土以前、一部は埋葬段階までに別地点で破砕されたことがわかる。また、⑤には②に接合する破片以外に多数の土器片が集積する(第28図)。そのような集中地点は他に認められず、残った土器片を廃棄した可能性が考えられる。さらに墳丘造成や墓堀掘削作業に支障のない位置であるため、土器を破砕した候補地ともなう。なお、2つの埋葬施設は、ともに墳丘盛土下に構築されており、①と③・②と④・③と④の接合関係からほぼ同時に埋葬されたこととなる。③の土器は本来10個体程度とみられるが、脚の付く器台・高坏等が7個体分も確認され、これらが葬送儀礼の主要な器種であったことが考えられる。④のほぼ1個体分の鉢(12)は、他に別個体片1点しかないため、第2埋葬被葬者のために選択され配置された土器と言える。②の土器が①③④と異なる大型品であることは、盛土下に納める土器として予め用意されたことを示す。以上のことを踏まえ、復元し得る造墓・埋葬に伴う土器祭式の過程は以下のとおりである。

28号墓造営に関わる土器祭式の過程

- 1: 墳丘基底部・埋葬施設構築面の造成。※これに先立つ儀礼行為が想定されるが不詳。
- 2: 各埋葬施設の設置。※遺体安置前後に葬送儀礼に使用した祭式土器を破砕⑤⇒各埋葬に関わる土器祭式①③④
- 3: 盛土前の墳丘山側両隅に、破砕した大型甕(16)・壺(13・14)をそれぞれ正位で再配置する②。
- 4: 墳丘盛土施工後、墳丘形態を整える。※②を墳丘内に埋め込む 墳丘の竣工。
- 5: 第1埋葬上・第2埋葬上北脇に、それぞれ土器を集積する③④。
- 6: 破砕した土器の残余を墳丘北側へ集積・廃棄する⑤。埋葬作業、葬送儀礼の終了。

第1埋葬に関わる土器祭式

- 1: 墓堀掘削。※墓堀北隅部分に昇降用ステップが削り残される。←遺体などの搬入経路を示す。
- 2: 納棺して棺に蓋をする前後に、棺裏込上に高坏(器台)脚裾破片1点を置く①。
- 3: 木棺埋設。墓堀埋戻し後、0.2m大の角礫と棺裏込上のものと同一個体の脚裾破片2点を置く①。
- 4: 墳丘盛土後、埋葬施設上に破砕した土器80片以上を集積する③。(①の残りの破片含む)

第2埋葬に関わる土器祭式

墳丘盛土後、埋葬施設上北脇に鉢1個体分の破片と第1埋葬上の器台(8)1片を集積する④。

※鉢破片のうち1片のみが墳丘盛土下の大甕(13)・大甕(16)付近から出土した②。

写 真 图 版



(1) 調査地遠景 (南より)



(2) 調査地遠景 (南より)



(1) A・B区 (西より)



(2) A区 全景 (南東より)



(3) A区 全景 (東より)



(4) B区全景 (西より)



(5) B区全景 (西より)



(6) B区全景 (南西より)



(7) B区 41号墳 墳丘検出状況 (西より)



(8) B区 42・43号墳 墳丘検出状況 (西より)



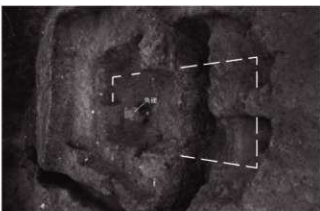
(1) C区 全景(北より)



(2) 27号墓 墳丘検出状況(北西より)



(3) 27号墓 墓壇完掘後の状況(北西より)



(4) 27号墓 木棺痕跡と内部の角礫(北西より)



(5) 28号墓 墳丘検出状況(北西より)



(6) 28号墓 墓壇完掘後の状況(南東より)



(7) 28号墓第1埋葬 木棺痕跡検出状況(南東より)



(8) 28号墓第2埋葬 木棺痕跡検出状況(南東より)



(1) 28号墓第2埋葬 管玉検出状況 (南東より)



(3) 28号墓 墳丘盛土下南隅付近土器出土状況 (北より)



(2) 28号墓 墳丘盛土下東隅付近土器出土状況 (西より)



(4) 28号墓 墳丘南側土器出土状況 (北西より)



(5) 29号墓 墳丘検出状況 (南東より)



(6) 29号墓 墓壇検出時の状況 (南東より)



(7) 29号墓 墓壇痕跡検出状況 (南より)



(1) D 区 (平成16年度) 全景 (西より) ※合成写真



(2) D 区 (平成16年度) 全景 (北より) ※合成写真



(3) D 区 (平成16年度) SE01 (南東より)



(4) D 区 (平成21年度) 全景 (南より)



(5) D 区 (平成21年度) 土器集中地点① (南東より)



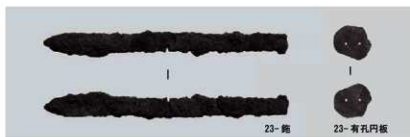
(6) D 区 (平成21年度) 土器集中地点④ (西北西より)



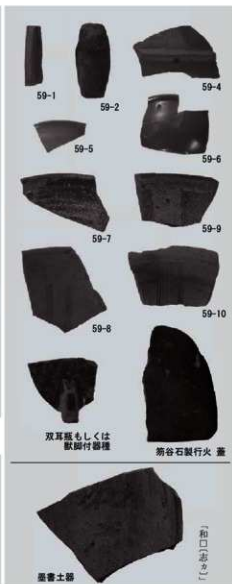
(7) D 区 (平成21年度) 土器集中地点⑦ (北東より)



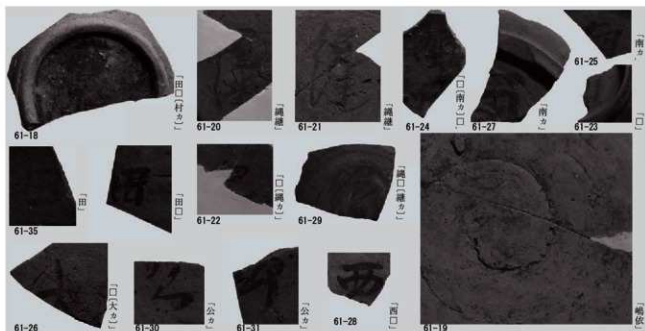
(1) B区 出土土器



(2) B区 41号墳の副葬品と遊離遺物



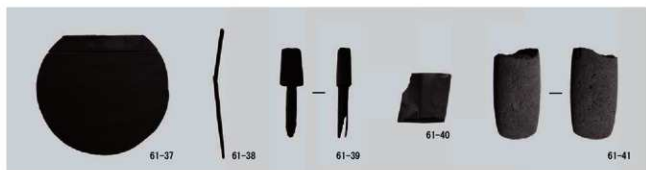
(3) D区(平成16年度)の遺物



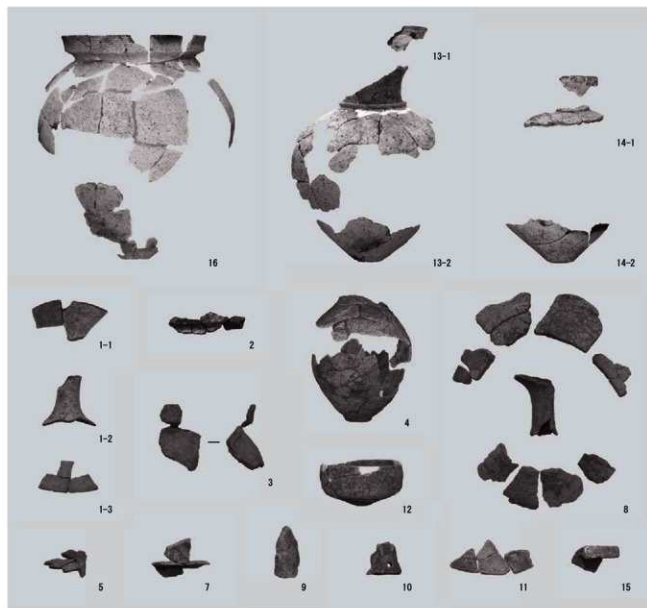
(4) D区(平成21年度)の墨書土器



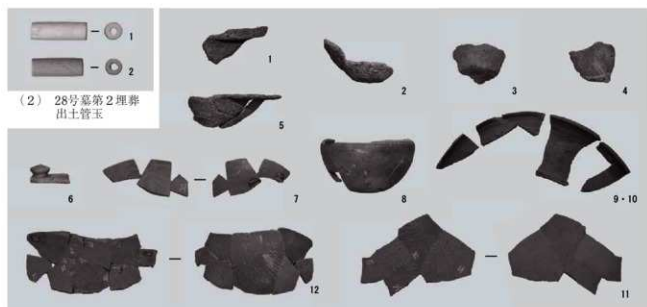
(1) 平成21年度調査区の弥生土器・土師器



(2) 平成21年度調査区の木製品・石製品等



(1) 墳墓群出土土器



(3) その他の出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	てんじんやまこふんぐん								
書 名	天神山古墳群								
副 書 名	一般県道三尾野鯖江線道路改良工事に伴う発掘調査								
巻 次									
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第126集								
編 著 者 名	御嶽貞義 赤澤徳明 山本孝一 藤本康司 水谷圭吾								
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター								
所 在 地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644								
発行年月日	西暦2012年2月17日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
てんじんやま 天神山 こふんぐん 古墳群	ふくいけん 福井県 さばえし 鯖江市 いりちよう 入町 ふくいし 福井市 みおのちよう 三尾野町 はなもちよう 花守町	18201	02001	36° 3' 31° ~ 36° 3' 49°	136° 13' 34° ~ 136° 13' 55°	20021101~ 20030731 20040701~ 20041228 20090401~ 20090430	1280 1600 480	記録保存 調査	
	所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特記事項		
	天神山 古墳群	散布地 墓	中世 古代 古墳 弥生 縄文	井戸 古墳 墳丘墓		陶磁器・土師皿 墨書土器・風字硯 鉢・土師器・須恵器 管玉・弥生土器 縄文土器・石器	調査対象地内の古墳の 名称・号数を確定する ため、天神山古墳群を 改めて踏査した。		
	要 約	A区では古墳1基(44号墳)、B区では古墳3基(41~43号墳)が確認された。いずれも古墳時代前期の古墳である。42・43号墳は盛土の流失が激しく、44号墳は大きく削平され、埋葬施設が残存しない。41号墳は、平面的に埋葬施設を確認し得なかったが、墳丘断面図から墓壙と棺のおもかな位置が復元できた。その付近から棺外副葬したとみられる鉈が出土した。この他、B区では点在する平安時代の須恵器が確認された。また、縄文時代の遺物も確認された。							
		C区では墳丘墓3基(27~29号墓)を確認した。終末期中葉・末葉の墳丘墓である。27・29号墓は各1基、28号墓は2基の埋葬施設がある。副葬品は28号墓第2埋葬の管玉2点がある。なお、28号墓の祭式土器の状況は、埋葬儀礼(土器祭式)の一端を窺い得るものである。また、C区にも点在する平安時代の須恵器が確認された。							
D区は、過去の圃場整備以前に丘陵から尾根が伸びていた地点であり、削平部分を挟んで北側(平成16年度調査分)と南側(平成21年度調査分)にそれぞれ谷状地形を確認した。平成16年度の調査では古代の須恵器や中世の越前焼などが出土した。平成21年度の調査では多量の弥生~古墳時代の土器と古代の須恵器などを確認した。須恵器の中には墨書の認められるものや転用硯、風字硯片が確認された。丘陵上を含めた広い範囲で9世紀代を中心とする須恵器が出土し、墨書土器などが確認されたことなどから、付近に古代寺院の存在したことが推測される。また、山頂支群の古墳が中世墓に改変されていること、近辺で空風輪が採取されたこと、過去に13世紀後葉とみられる宝塔塔身が出土していることから、中世にも寺院が存在したことが考えられる。									

福井県埋蔵文化財調査報告 第126集

天神山古墳群

— 一般県道三尾野鯖江線道路改良工事に伴う発掘調査 —

平成24年2月6日 印刷

平成24年2月17日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 白崎印刷株式会社

〒910-0843 福井市西間発3-715
